

プロのために、そのすべてが造られている。EOS-1D X

プロにとって理想のカメラ。それは、一台のカメラであらゆる撮影領域に対応できることです。

キヤノンは、技術の粋を尽くして、その理想に迫ります。

35mmフルサイズ、常用ISO51200、先進の画像処理エンジン「デュアルDIGIC 5+」が生む高画質。

最高約12コマ/秒の高速ドライブと、困難な撮影条件を克服するための、新AE・AFシステム。

これまで「1D」「1Ds」シリーズがリードしてきた2つの世界がこの一台に。

新しい領域を開拓する、EOS-1D X。新登場。

Canon

make it possible with canon



EOS-1D X (EF50mm F1.2L USM装着時) : オープン価格

- 有効画素数約1810万画素 ●ISO100～51200(L:50, H1:102400, H2:204800) ●デュアルDIGIC 5+
- 最高約12コマ/秒高速連続撮影 ●超高速連続撮影時最高約14コマ/秒 (AE/AF固定、JPEG、ミラーアップ) ●61点高密度レティクルAF ●新AFシステムEOS iSA System
- 顔や色を認識してAFフレームが連動するEOS iTR AF

EOS-1D X



©キヤノン EOSデジタル ホームページ
canon.jp/eos-d



©キヤノンお客様相談センター
デジタルカメラ **050-555-90002**

[受付時間] 平日9:00～20:00 土・日・祝日10:00～17:00 (1/1～3は休ませていただきます。)

※海外からご利用の方、または050からはじまるIP電話番号をご利用いただけない方は043-211-9556をご利用ください。※受付時間は予告なく変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

カタログは、canon.jp/catalogからダウンロードしていただくか、ハガキの場合は、住所、氏名、電話番号を明記の上、〒261-8711千葉県千葉市美浜区中瀬1-7-2 キヤノンマーケティングジャパン(株)カタログ請求[EOS-1D X]係までお送りください。※カタログ請求を通じてお客様より任意でご提供いただいた個人情報は、カタログ送付の目的のみに使用いたします。

キヤノンマーケティングジャパン株式会社



エチオピアの首都、高地2400mにあるアディスアベバで開催された第11回「Great Ethiopian Run」。市内のメスケル広場と呼ばれる場所からスタートするこの大会は、アフリカ大陸最大の10kmロードレースである。

エチオピアはローマ、東京と五輪マラソン2連覇の偉業を達成した「裸足の王様」アベ・ベキラの伝統がしっかり継承されている。貧富の差を問わず、走ることに興味を持っている人が多く、また、国内にこれといった娯楽が少ないためか、参加者は毎年膨れ上がる一方だ。第11回を迎えた昨年は3.6万人が参加料支払い証明の代わりのTシャツで健脚を競った。

英雄ハイレ・ゲブレセラシエが主催するこの大会は同国最大のスポーツ祭典に発展し、大会当日は国がひとつになる。ゲブレセラシエとの親交が厚く、大会の公式カメラマンを務める望月次朗（AJP S会員、パリ在住）は初めてこのレースを撮影したときの印象をこう語る。

「スタート時にランナーたちが一斉に唸り声をあげる。高いビルの上から見下ろしながら撮影すると、大地が揺れるような錯覚を覚える。余計なことだが、この凄いエネルギーをなんとか国の発展のために使えないものだろうか」と。

2011.11.27

the biggest 10km road race in Africa, Great Ethiopian Run

写真/望月次朗 Photo by Jiro Mochizuki



© Tsutomu Kishimoto

はじめに

一般社団法人日本スポーツプレス協会会長 水谷章人

2011年3月11日の東日本大震災、福島原発事故、

想像を絶する災害を私たちは忘れることはできません。

あれから1年、この震災で犠牲になられた方、被害を受けられた方々に、

改めて心よりご冥福とお見舞いを申し上げます。

昨年35周年を迎えた日本スポーツプレス協会(AJPS)は、

一般社団法人として再スタートを切って早2年が経とうとしています。

その間、写真も記事も含めたスポーツジャーナリズムを取り巻く環境は、

著しく変化し続けています。

そういう現状を踏まえた上で、AJPSという団体は、協会員が相互に協力し、

一致団結の精神で、さらに進化していかなければなりません。

そのためには、リニューアルした「AJPS Magazine」や「Extreme Press」等を通して

AJPSを社会に発信し、信用、信頼される協会を目指すこと、

ひいてはスポーツ文化発展のために寄与することを目的としています。

スポーツを伝えるものとして、我々には何ができるのか、そして何を為さねばなら

いのか。AJPS全体で今一度、問い直すべき時なのではないかと考えています。

AJPS VOL. 29

magazine 2011-2012

Association Japonaise de la Presse Sportive

CONTENTS

- FRONT PAGE
04 グレート・エチオピアン・ラン
- VIEWS OF AJPS
08 AJPSの視点
- ROAD TO LONDON
17 ロンドン五輪特集
- 20 SEVEN SUPERATHLETES TO MEET
ロンドンで出会う7人の怪物
- 26 POSSIBILITIES FOR GLORY
彼らの可能性
- 32 AJPS MUST-SEE ATHLETES
AJPS 会員に聞く ロンドンのイチおし
- AJPS CATEGORY REPORTS
36 AJPS カテゴリーレポート
- FROM EDITORS
54 編集後記

SanDisk®

最高のカメラには、 最高のメモリーカードを。

カメラの性能を最大限に引き出す、
最大100MB/秒*1の超高速データ転送。

UDMA7に対応したサンディスク最高峰のコンパクトフラッシュ、エクストリーム プロ シリーズ。



最大
100 MB/秒
の書き込み速度

サンディスク エクストリーム® プロ™
コンパクトフラッシュ® カード

128GB UDMA7対応

UDMA7

UDMA7対応カメラとの組み合わせで、
RAW+JPEGでの連写撮影をより快適に。

UDMA7対応のカードリーダーで、
パソコンへの高速データ転送が可能に。

[大容量]

128GBの大容量で、高速連写による
膨大なRAW+JPEG画像も、
ハイディフィション動画も余裕で保存。

[耐久性]

衝撃、振動、気温、湿度など過酷なテストをクリアし、
極限の状況下でも正確に動作するよう設計。

[信頼性]

厳しいストレステストをクリアした無期限保証*付き。



UDMA7対応

サンディスク イメージメイト®
オールインワン USB3.0 リーダー/ライター

超高速性能・大容量

Extreme Series

エクストリーム シリーズ

サンディスクはプロカメラマンの82.4%から「安心のブランド」と評価されました。*2010年2月当社調べ。詳細は当社Webにてご確認ください。http://www.sandisk.co.jp/reader

サンディスクはフラッシュメモリーカード世界・国内*シェアNo.1ブランドです。 **サンディスク**

*2010年 Gartner調べ [Gartner Dataquest No. G00211697 03/25/2011]。 **GfK Japan調べ (国内の有料家電量販店販売実績集計/2011年)。 ※SanDisk, SanDiskロゴ, コンパクトフラッシュ, SanDisk Extreme Pro, サンディスクエクストリーム プロ, 及びイメージメイトは、米国及びその他の国におけるSanDisk Corporationの商標または登録商標です。その他の商標も特定の目的のために使用されるものであり、各権利者によって商標登録されている可能性があります。 *1 最大書き込み速度の数字はサンディスク社テストの結果に基づきます。読取り速度はこれより遅くなります。ホスト機器によって読取り/書き込みの速度は異なる場合があります。1,1メガバイト(MB)=100万バイト。1メガバイト(GB)=10億バイト。1秒速=150KB/秒。記載された容量の一部はフォーマット及びその他の機能に使用されるため、すべての容量をデータ保存のために使用することはできません。 *2 保証内容に基づきます。



写真・文 早草紀子

写真は、2011年ドイツW杯グループリーグ第2戦のメキシコ戦のものです。この試合は、澤穂希選手が決めるような気がしていました。

彼女の次の得点は、釜本邦茂さんの記録を超えるメモリアルゴールになることはわかっていました。長い間公式戦で澤はゴールから遠ざかっていました。それでも、この試合で決めるような雰囲気なぜかあったんです。それも、決めることなら調子が上がってきている宮間あや選手からのパスか、同じく彼女からのセットプレーだと。

普段、女子は観客のいる状況でプレーすることはないので、ゴール後、スタンドにアピールすることはほぼありません。アシストした選手のところへ走っていくことがほとんどです。なので、この試合ではあえて宮間選手がいるバックスタンド側に陣取りました。逆サイドからのセットプレーも考えられましたが、より確率の高い、宮間のサイドにヤマをはったんです。結果は、ピンゴールでした。いつもは外しがちな私のヤマはりもこのときは的中、この瞬間を仕留めることができました。

力強い澤のガッツポーズはここからいくつか生まれましたが、このシーンはどこか清々しく、やわらかな感じでした。彼女の解き放たれたような印象が残っています。長く彼女を撮影していますが、こういう表情は初めてでした。

ここからが正念場です。ね、世界を制したことで、選手たちが戸惑いを感じながらプレーしていることに少し同情もします。でも、経験したことのない強烈なプレッシャーの中で、なでしこたちがどんなプレーに行きつくのか、それをこれからも見届けたいなと思っています。

未完の三冠馬

写真・文 島中良晴

2011年、史上7頭目の三冠馬が誕生した。その名はオルフェール。

異なる条件の3つのレースを制するには、速さ、強さ、運を併せ持つ必要がある。

私が現場で三冠馬誕生の瞬間に立ち会うのは、デイープリンバクト以来2頭目であるが、このオルフェールを初めて撮影したのは、2着に敗れたレースだった。無敗の三冠馬となったデイープリンバクトとは、少し違う出会いだっただけに、素質があるのはわかって三冠馬という未来を想像することは、この時点で全くなかった。

そして、連敗は「4」を重ねることになる。ただ、この連敗はこの馬には良かったのかもしれない。勝てば勝つほど、いろいろな修正を大胆にすることが難しくなり、微調整を繰り返すうちに、根本的な修正が難しくなることも多々あるからだ。デビュー戦で、ゴール後に騎手を振り落としたほどのオルフェールには、この連敗の間じつくりと人馬のコミュニケーションを築けたこそが、後に三冠馬になる大切な時間になったとも言えるだろう。

皐月賞、ダービー、菊花賞。まさに圧勝の一言だった。デイープリンバクトが三冠を達成した時に、敗れた騎手からは「時代が悪かった」という声も聞かれた。正直、撮影している側からの様々な感触を言わせてもらえば、そこまではまだ到達していないように思う。しかし、このオルフェールはまだ完成されたサフラレッドではない。三冠という特別なものさえも序章と言えるなら、新たな「時代」というものに、立ち会うことができるだろう。

Singapore 2011 GP

写真・文／熱田護

2011年のシンガポールGP、金曜日の夕暮れだった。

僕はパドックのすぐ横にある大きな観覧車に乗り込むと、

一番美しい時間にちょうど真上になるよう、

そして天気が悪化することなく、マシンが無事走ってくれるよう、

ただ祈った。

シンガポールで優勝したのは、その年の王者となったセバスチャン・ベッテルだった。

F1にはもう20年以上、通い続けている。

生活のサイクルは旅を基本としたものになった。

日本においては、F1の人気は低迷し、セナがいた頃をピークにあとは下がる一方だ。

けれど、この世界にどっぷり浸って生きている自分にとって、

その面白さは毎年変わらない。あるいは毎年その面白さは増してゆく。

なぜか？

単純な話だ。

世界で最も優れたドライバー達が、世界で最も速い車で競う。

そこには、世界最高の緊張感と高揚感があり、そして世界最高の美しさがある。

Kitzbühel 2011.01.22

写真・文/田中慎一郎

2012年の大会で第72回を数えるレースがヨーロッパ連なるオーストリアのキッツビュールというスキー場で開催された。アルペンスキーファンで知らない人はいないこの大会、「ハーネンカムレーネ」は1931年から毎年開催されている伝統ある大会である。しかし、一般的に有名なのはそれ故ではない。

現在、アルペンスキーワールドカップは10月後半から3月中旬までヨーロッパと北米を中心に20カ所ほどのスキー場をめぐり、多くの観客を集めている。アルペンスキーには主に4種目あり、ドイツ語、フランス語、イタリア語、英語のほか様々な言語が飛び交うワールドカップの現場ではあるものの、日本語で表記すれば、それはスピードの速い順に滑降、スーパー大回転、大回転、回転となる。

同じコースを滑ってタイムを競い、100分の1秒でも速いものが勝手を争うアルペンスキー。その花形種目である滑降の最高速度は時速130kmにも達する。スキーという「板きれ2枚」に生身で乗って出すその速度は、車やオートバイの感覚より何倍ものスピード感を感じることが出来る。

世の中には出場するだけで「勇者」と称されるスポーツ競技や競争は数多くあるだろうが、そのなかでも真の勇者と賞賛されるべきものは何かと問えば、私はこのキッツビュールの滑降を真っ先に挙げる。

ザルツブルグからほど近いキッツビュールの滑降コースは全長3.72m、標高差は60mであるが、特筆すべきは世界一の難コースといわれるそのコースレイアウトと恐怖心を増幅する青氷の急斜面である。

スタート直後3秒前後で時速80kmに達し、そのままの速度で30度以上の傾斜の急斜面に飛び込んでいくマウスファール（ねずみ取り）、そのジャンプは80mにも達する。

そして氷の急斜面へ90度の高速ジャンプを繰り返すシユタールバンク（切り立った斜面の意）の壁は氷の急斜面を高速滑降するハウスベルグのジャンプ時速130kmオーバーのツェーレンシュタール前（疾走）の直滑降とそれその難所は名前がついているキッツビュールの滑降コースは息をのむところがない。

そして、その「世界一の難コース」を裏付けるのは、毎年必ずと言っていいほど、激しく転倒して動くことができず、コース上からヘリコプターにつり下げられてそのまま病院送りになる選手がいることである。そして時折、恐怖心に打ち勝てなかった選手がジャンプの手前で減速するように遠回りなターンをすることからも、他の滑降コースとは一線を画していることが証明される。

私は毎年「横滑り」であるが、この急斜面のコースに入っている。そして毎分秒感じるには、「ここに出場する選手はスピード感や傾斜に対する恐怖心が常人の域をはるかに超えている」ということである。頭のネンが一本どころか何本も抜けていない、普通の感覚では出陣することは無理である。断言できるだけの圧迫感がこの滑降コースには存在する。

実際、アルペン大会であるオーストリアではオリンピックの金メダルよりもこのキッツビュールの滑降を制することがある勲章となっており、滑降コースの脇にかかるコイントラのキャビンに歴代の勇者（勝者）の名前は刻まれ、永遠に語りつがれることになる。私は毎年今季もこの滑降コースに足を踏み入れた。「世界最高のキッツビュール滑降コースのスタートバーを切る選手たちに敬意をこめて」

写真はコース後半、ハウスベルグの谷に飛び込んでいくジャンプ。観客は毎年万人を越える。



1896年、アテネで幕を開けた近代オリンピックは今年で30回目の夏を迎える。スポーツを愛する者のみならず、世界中の人々の注目を一身に集めるオリンピック。4年に一度のその時を、ひたすら待ち望んできたアスリート達が、この夏ロンドンに集結する。



ROAD TO LONDON



At the heart of the image

頂点を継ぐ者。

高画質、高速、高精度。そして、操作性と信頼性。

デジタル一眼レフカメラ

D4

N E W



6500万本
NIKKOR

ニコンカスタマーサポートセンター
0570-02-8000

一般電話、公衆電話からは市内通話料金でご利用いただけます。営業時間9:30~18:00(年末年始、夏期休業等を除く毎日) ●Webサイトがご利用いただけません場合は、(03)6702-0577におかけください。 ●ファクシミリでのご相談は、(03)5977-7499へご連絡ください。

www.nikon-image.com | 株式会社ニコン・株式会社ニコンイメージングジャパン

怪物たち

出逢

回
ボルト

SEVEN SUPERATHLETES TO MEET

USAIN BOLT



スポーツジャーナリスト折山淑美が語る

ロンドンに集う



人の怪物

文／折山淑美

4年に一度だけの大舞台。その勝負の瞬間に身体や心の調子をピークにもってこけるのは、極めて難しい。だがそれを、いともたやす気にやっつけてしまう選手たちがいる。しかも彼らは4年間という時空さえも無視するかのよきに、強さを発揮し続ける。その驚異的な強さはまさに、「怪物」としか表現しようがない。7月27日に開幕するロンドン五輪にもまた、そんな怪物たちが舞い戻ってくる。

その注目の大会で、世界中の視線を最も浴びると思われるのが前回の北京五輪陸上競技で男子100mと200m、そして4×100mリレーでも3走を務め、3種目とも世界新記録で金メダルを獲得したウサイン・ボルト（ジャマイカ）だろう。

彼の北京の走りは世界を驚愕させるものだった。100m決勝では、優勝を確信して喜んだ最後の20mほどは両手をだらりと下げて流して走りながらも、追い風2m以下の公認記録では人類初の9秒6台となる、9秒69を記録した。

驚くのはこのレースは彼が本気で走った6回目の100mだったことだ。12歳から陸上を始めたが、最初は200mと400mを専門にし、17歳の時に200mにおいて10代選手で初の20秒突破となる19秒93を出して注目された選手だった。身長190cmの身体はロングスプリントの方が

活かせるという考えだったためにジュニアの頃は100mを走っており、初レースは21歳になる1カ月ほど前の07年7月18日。それも200mのスタート練習の環として走り、10秒03を出していた。

その当時の彼の北京五輪の目標は200mの制覇のみだった。だが5レース目だった08年5月31日の9秒72の世界記録樹立で方針が変わった。それが北京での驚異的な走りにつながったのだ。さらに特別な思いもある200mでも、96年に出した当時、数十年前は破られないだろうと言われたマイケル・ジョーンソン（アメリカ）の記録を0秒02更新する19秒30の世界記録を樹立した。

だが誰もが、その驚愕の偉業には先があると思っていた。それは100mではラスト20mを流した上、風は無かったこと。そして200mの記録は向かい風0.9mという条件だったからだ。

その期待にボルトは、翌年の世界選手権でアッサリ応えた。100mで9秒58、200mでは19秒19と世界記録更新を果たしたのだ。100mの瞬間最高速度は時速45km。平均ストライドは244.4cmで、80m以降は28.5cmという歩幅で走れる彼だからこそ出せる記録だが、まだ短縮できる可能性は高い。計算上では追い風0.9mで

9秒58だった100mは、公認条件限界の追い風2mなら9秒50で、成長分を考えれば9秒4台は可能なタイム。向かい風0.3mだった200mは、18秒台さえも手の内に入れている。

10年シーズンの後半から背中とアキレス腱の故障で昨年は記録を伸ばせなかったが、今年は万全の状態でも臨めそうなボルト。ロンドンでも再び、驚異的なパフォーマンスを披露してくれるはずだ。

最初が陸上なら、次は水の怪物。そうなることをはげしいのが、マイケル・フェルプス（アメリカ）だ。08年アテネ五輪で100mと200mバタフライ、200mと400m個人メドレーにリレー2種目を加えて6冠を獲得した彼は、北京では個人種目の200m自由形と400mリレーをプラスして8冠を達成。72年ミュンヘン五輪7冠のマーク・スピッツ（アメリカ）の記録を超える、五輪史上初の快挙を果たしたのだ。

競泳で速く泳ぐために最も必要なことは、水中でいかに身体の断面積を小さくした、水の抵抗を受けにくいポジション（ストリームライン）を保てるかということだ。水の密度は空気約800倍で、運動する時の抵抗は速度の2乗に比例して大きくなる。

選手は基本的に4種類の泳法をマスターするところから始めるが、特殊な泳ぎである平泳ぎ以外には共通性があり、元々理想的なストリームラインを保てる選手はどの種目も速く泳げるのだ。その上天才的な身体能力を持った選手なら、複数の種目で世界一になることも可能だ。

リレー種目は他の選手の実力も影響するが、北京の個人で100mバタフライを除く4種目で世界記録を樹立し、リレーも3種目とも世界記録で優勝。男子の全16種目中の半数で金メダル獲得というのは天才でなければできないこと。さらに9日間の大会期間中、予選と準決勝を含めて最低でも17回のレースをこなさなければいけない体力は、まさに、「怪物」だからこそできるものだ。

そのフェルプスも昨年の世界選手権では、7種目に出場して4冠獲得に止まった。個人種目で落とした200m自由形と200m個人メドレーは、200m背泳ぎと400m個人メドレーを加えた個人4冠獲得で、「新・怪物」と称されるようになったライアン・ロクテ（アメリカ）に競り負ける2位だった。

だがロンドンでは再び怪物の称号を取り戻してくるはず。ロクテとの熾烈な最強争いは目の離せない戦いになりそうだ。



KOHEI UCHIMURA

MICHAEL PHIPPS



そんな彼らに続く怪物が、日本にもいる。そのひとり女子レスリングで63kg級の伊調馨ととも五輪3連覇を狙う、55kg級の吉田沙保里だ。女子レスリングは世界選手権が1987年から開催され、五輪の正式種目になったのは04年アテネ五輪からと歴史は浅いが、その中で最強といえる成績を誇るのが吉田だ。

元全日本王者である父の指導で3歳からレスリングを始めた吉田は、15歳で出場した98年世界カデット選手権で優勝して翌年も連覇。00年と01年は世界ジュニア選手権を連覇し、02年から12年まで世界選手権と五輪を連覇中だ。

その間01年全日本選手権で山本聖子に敗れて以

来、08年1月の団体戦で戦うW杯で国際試合初黒星を喫するまで公式戦119連勝を記録。その後再び連勝を続けていて、国際大会の個人戦では96年以来昨年の世界選手権まで27大会連続優勝を記録するという、無類の強さを誇っている。

男子では北京で銀メダルを獲得した体操の内村航平が、09年以降は世界選手権個人総合3連覇中だ。特に昨年は6種目中5種目でトップの得点を獲得し、総合でも2位に310.1点差を付け、群を抜く強さを見せた。

「ミスをしたのと美しいのは前提条件」とまでいう内村が目指しているのは、完璧で美も備えた体操だ。ロンドンに向けて演技構成点のDスコ

アもあがる取り組みをしている彼は、個人総合だけでなく種目別でも優勝を狙おうという意気込みも持っている。

ライバルをみれば強敵の中国も北京五輪優勝の楊威の引退以来、個人総合の選手は育っていない。世界的にも、育てるのに時間がかかり肉体的にも負担が大きい個人総合よりは、種目別のスペシャリスト育成に力を入れる傾向もあるからだ。進化を続ける内村の個人総合での独走に、揺るぎはないだろう。

日本期待の競技にも、ライバルとなる怪物候補がいる。その筆頭が柔道男子100kg超級のテディー・リネール(フランス)だ。身長204cm、

体重129kgの彼は、07年世界選手権を18歳5カ月で初制覇した。

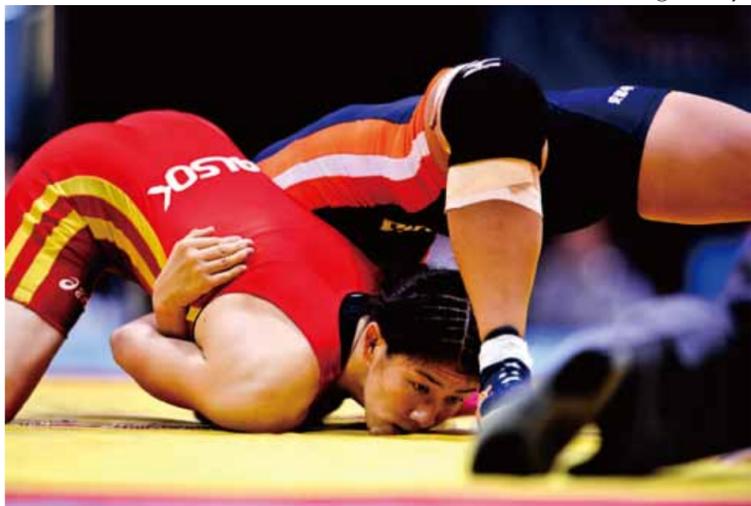
前回の北京五輪では若さを露呈して準決勝で敗退したが、翌年からは世界選手権連覇を続行中。あの巨体に積極性や上手さが加わり、とんでもない選手に変身している最中だ。日本悲願の金メダル獲得に、大きく立ちちはかかる存在だ。

また2月5日現在の世界ランキングで4、5、6位を日本勢が占めるバドミントン女子ダブルスでは、於洋/王晓理(中国)が圧倒的な強さを誇っている。

於洋と組んだ北京五輪では、男子並のパワーで圧倒した選手だが、10年秋に王とペアを結成して以来は23試合で敗戦は4回のみ。19回優勝して2位2回、3位1回で、一度だけ表彰台を逃したのも途中棄権と、とんでもない強さ。男子顔負けのパワーとスピードを持つ彼女たちを破るのは、まさに至難の業といえる。

ロンドン五輪では、ここにあげた以外の怪物が出てくる可能性ももちろんある。その新たな出会い、今から楽しみだ。

© Takao Fujita



SAORI YOSHIDA

© Takao Fujita



TEDDY RINER

WANG XIAOLI & YU YANG



© Takao Fujita

オリンピックの思い出

写真・文／岸本勉



© Tsutomu Kishimoto

1992年アルベルビルから、2010年バンクーバーまで、本当にたくさんのおにぎりを食べた。五輪でこんなにおにぎりを食べたのはフォート・キシモトのスタッフ以外は考えられない、と思う。写真では表彰されなければ、おにぎりを食べた数なら金メダルに値するんじゃないかと思ったりもする。

そのおにぎりはウチの親父・岸本健(フォート・キシモト社長)が握る。中途半端には手伝えない。親父には親父の握り方があるのだ。これから話すことはフォート・キシモトの一員として11回の五輪取材で食べた「おにぎり」の話である。

1988年、ボクはカルガリー五輪を観に行つた。留学、いや遊学先のバンクーバーから約1時間半のフライト。そのカルガリーでおにぎりを食べた。なぜハンバーガーでもなくホットドッグでもなかったのか。それは毎朝滞在先を出る時におにぎりを持たされるから。当時のボクはカメラマンでもなんでもない。しかしスタッフのカメラマンのその姿は、まさに五輪というスポーツ写真の戦場に向かう二等兵(センパイ方、スママセン)のようだった。そこから「五輪といえばおにぎり」、そんな思い出がはじまった。

五輪取材でイチバン大切なことは泊まること。これはいつも雑魚寝。個室が与えられたことは一度もない。どうせ帰ってきたらボタンキューだから、特に問題もない。

その次に大切なことはやはりメシである。おにぎりである。五輪前にその雑魚寝アパートが決まると、まず炊飯器、コメの手配が重要な案件としてミーティングで話し合われる。撮影スケジュールは二の次なのだ。幸い、近年は炊飯器も現地

購入できたり、コメも日本米に近い品種が手に入ったりする。これだけで準備の大半が終わるのである。

バルセロナ五輪は初めて撮影した夏季大会。とにかく暑かったので、おにぎりが腐るのではないかとヒヤヒヤした思い出がある。機材があるにもかかわらず、他社のカメラマンや記者の方にもおすそわけするために10/20個持つて出かけ、塩加減が弱いと傷みも早いから朝イチパンで配る。喜ばれることもあったけど、他社のカメラマンは朝ごはん付きのメディアアビレッジや一流ホテルに滞在することもあるように、時にはもらわれないこともあった。

ソルトレイク五輪は9・11のテロ後にアメリカで行われた最初のビッグイベントだった。セキュリティが厳しくないわけがない。当然プレスセンターへの持ち込みが厳しくなる。当時のおにぎりはアルミホイルで包まれていた。それを2個1セット×100とか200とかいう気の遠くなるような数のおにぎりをX線に通すのだ。セキュリティも人の子、「これはライスボールでオレの昼飯なんだ」と言えばすんなり通してくれるときもある。意地悪でクソまじめなセキュリティは、全部の包みを開けると……。お願いです、それだけは勘弁してください。

この夏はロンドン五輪だ。空港のセキュリティが厳しくてイヤな思いをした同業者がたくさんいるロンドン。またおにぎりチェックがあるかと思うとぞっとする。そんなカメラマンの悩みをよそに親父はきつとまた大量のおにぎりを握るんだろう。そして我々も、なんだかんだ言いつつ、またそのおにぎりをたのしく食すのさだろう。

Kosuke Kitajima

北島康介

写真・文／藤田孝夫

今、パソコンのキーボードを叩く机の傍らには、なぜか競泳用のゴーグルと、メッシュのスイムキャップが置いてある。去年の6月、取材でアメリカに拠点を置く北島を訪ねた際、「よかったらどうぞ」、そう言ってお手渡ししてもらったお土産である。ついでに「キャップもごちそうになった。私はいつもニヤニヤしながら、そのゴーグルとキャップを眺めている。だって金メダリストからの贈り物なんだから……」

「平泳ぎ」について考えてみる。1972年シニョール五輪で7個の金メダルを獲ったマーク・スピッツ(米)、1988年ソウル五輪で6個の金メダルを獲ったクリスティン・オート(東独)、2008年北京五輪で8個の金メダルを獲ったマイケル・フェルプス(米)。競泳の世界において数多くのメダルをさらうのは、いつもスプリンター連である。たとえ種目の参加だけでは、これほどのメダル数は稼げない。彼らは皆、「自由形(クロール)」「バタフライ」「背泳ぎ」をかけた。所謂スプリンターと呼ばれる資質ある者は、どの泳法でも速い。

ただ前述の3人で、単種目の「平泳ぎ」を泳ぐ者はいない。それは平泳ぎという泳法に潜在特異性と関係する。一般的に平泳ぎは最も水の抵抗を受け、また運動量も要すると言われる。前へ前の推進力をひたすら追求する他の3泳法とは違い、揺く手と脚を足を体に戻す時「ブレーキ」がかかる。技術的、体的に、もっとも難しい種目かもしれない。ほんの数センチのズレが増幅し、大幅な

タイムロスを生ずる。競技体のバランスを最も要求される泳法。それが「平泳ぎ」なのである。思えば1988年アムステルダム五輪、日本競泳史に初の金メダルをもたらしたのも、鶴田義行の平泳ぎだった。

2000年の日本選手権、当時第一人者だった林亨を破り、北島は初の五輪切符を手に入れる。高校3年生のシニョール五輪。結果は100m4位、200mは予選敗退。北島は、切符から順風満帆なわけではなかった。ただ翌年福岡の世界水泳選手権は、今更言ってもない。その数ある実績の中で最も輝いているのが、アテネ、北京と続く五輪での100m、200m、2種目2連覇である。「チョー気持ちいい」「一回も言えねえ」が流行語になったように、オリピックが大衆に与える影響は計り知れない。4年に一度だけ、オリンピックの舞台だけは、日本中のだれもか水泳に目を向けてくれる。その切ない思いはアマチュア選手に生まるアスリートの「スプレッショナル」となり、夢となる。決して勝利を語るだけでは収まらない世界、恐るべき付加価値を伴う世界、それがオリンピックという虚像の真実。そこには金メダリストには見えない景色がある。

昨年7月、北島は上海の世界水泳に臨んだ。最初の種目100mでは1位と1秒以上の差をつけられ4位、完敗だった。「おれは、200mも難しい、俺」「メダリアは大層な手懸きで、俺とこ

るが、日本は100mに登壇した北島は、別人のような泳ぎを見せる。手足のバランスを欠いて泳がった泳ぎは、伸びのある大きな泳ぎに変わっていた。コーチの平井は言った。「こんな短期間で修正できるのは康介だけ」

ただ順調にコマを進めた決勝、残り10mのところ北島は力尽きる。揺いても揺いても、前に進まない。しかし王者が最後に見せた「足掻き」は、心を打った。都合のいいメディアは異口同音に「頑張った」「やっぱり北島じゃない」と。多分ほとんどの日本人が当たり前のよう、北島はロンドンに出ると思っただろう。しかしそう簡単にはいかない。まずは国内選考会を勝ち抜かなければならない。特別などない。日本にも、平泳ぎの精鋭たちは大勢いる。アテネ、北京の時ほど安泰な状況ではないことは、北島本人が一番わかっているはずだ。ちょうど12年前に自分が破った林の気持ち、今北島は感じているのかもしれない。もちろん北島のいないロンドン五輪などイメージできない。なぜなら彼が持っている。何かやりそうな雰囲気、いい意味で邪魔をするからである。ただ前2大会のようにうまくはいかないであろう、という覚悟もある。

金メダルを目指す人に向かって、結果が全てじゃない、などとは言えない。かといって「頑張っただけ」の言葉は、時に無力だ。ただこれだけは言える。どんな結果が待ち受けよう、北島康介の描いた軌跡は美しかった。

POSSIBILITIES FOR GLORY

彼らの可能性

POSSIBILITIES FOR
GLORY
彼らの可能性

Koji Murofushi

室伏広治

文/寺田辰朗

「ハンマー投の記録は、初速で決まります。セディフ(当時)が86m74の世界記録を投げたときは秒速30・7mでした。私は29m台のデータしかありませんが、自己記録(84m86・03年)のときは30m台だったかもしれません。」

時速に換算すると、セディフで110・5km。重量7・26kgのハンマーをこのスピードで投げ出すために行なうのがターンである。室伏広治は世界主流は4回転だが、セディフのように3回転の選手もいた。室伏の特徴を説明するに、選手を2つのタイプに分類するのわかりやすい。まずはパワー型の選手。回転スピードが遅くとも、最後のターン後に、パワーを生かして振り切りまでに速度を上げる。

対するスピード型の代表が室伏だ。99kgの体重は、1・10kgが平均のトップ選手たちの中では細身である。セディフの頭は93kg。最初投げたときは、体重も細身で回せることで、初速を上げてきた。高速ターンを支えたのは、父・重信氏譲りのハネの多い身体。テレビ番組で披露したこともあるとおり、跳躍力やジャンプ力は跳躍や短距離専門選手を上回る。そして重信氏直伝の技術も、高速ターンを支えた。父子は「ハンマー代からずっと」「回転軸と回転面をしっかりつくって安定させること」「重信氏に取り組み始めた、室伏自身も発想の豊かな選手。父親の技術に独自のアイデアを加えていった。アテネ五輪前には「単に回転スピードを上げるのではなく、丁寧に回って最後に

最大スピードに達する」ことを考え始めていた。アテネ五輪の金メダルが「初速」を高める取り組みの集大成となった。

アテネ五輪以後が第2期になる。年齢も30歳を過ぎ、身体のあることに「金属疲労のような症状」(室伏)が出始めた。年齢との戦いだったと言ったこともあった。克服するためのトレーニングは室伏独自のものが多かった。

バーベルにいくつものハンマーをぶら下げて、あえてアンバランスな状態で筋力トレーニングを行う。扇子を投げたり、新聞紙を片手で丸めたり、投網を投げたりもした。「筋肉も鍛えますが、感覚を磨くことが大きな目的でした。軽い物を持って重い物と同じだけの力を入れるように、自分で抵抗を作ることもします」

しかし、08年北京五輪は5位。慢性的に悩まされていた腰痛の影響でフォームが乱れていた。09年には降はファンダメンタル(基礎体力)の充実、より注力するようになった。「技術面はかなり研がれてきています。コンディショニングも良ければ、技術も全て良くなっていきます」。赤ちゃんの動きを参考にしたトレーニング導入もその一つ。筋肉が発達していない赤ちゃんは、理にかなった動きをするのである。

それらの成果が11年のテグ世界陸上で、大会最年長の金メダル獲得に結びついた。その投てきはアテネ五輪の頃よりも「良い動き。バランスが良かった」と室伏は言う。「理想は」投げる瞬間にまったく重さを感じないで投げられたときに、最大の投てきができていると思っています」

「理想は」投げる瞬間にまったく重さを感じないで投げられたときに、最大の投てきができていると思っています」

「理想は」投げる瞬間にまったく重さを感じないで投げられたときに、最大の投てきができていると思っています」

「理想は」投げる瞬間にまったく重さを感じないで投げられたときに、最大の投てきができていると思っています」

「理想は」投げる瞬間にまったく重さを感じないで投げられたときに、最大の投てきができていると思っています」



04年テグ(8.25kg)、09年テグ(7.26kg)
08年北京五輪、当時世界歴代5位、現歴代6位

POSSIBILITIES FOR
GLORY
彼らの可能性



© Rimako Takeuchi

Fairy Japan POLA

フェアリー ジャパン POLA

文/山崎浩子

2009年12月10日。
少女たちは何もわからないまま集まった。
ただ、フェアリー ジャパン POLA (新体操日本ナショナル選抜団体チーム) のメンバーになれたという喜びだけを胸に。
その5日後。
少女たちは何もわからないままロシアに旅立った。
ただ、どんなことが待ち受けているのだろうという不安だけを胸に。
そして、「ロンドンオリンピックでのメダル獲得」という遠すぎる目標を与えられ、少女たちは何もわからないままロシアへ合宿に入宿した。
言葉もわからず、どんな作品になるのかもわからず、メンバーもロシア人コーチの性格もわからず、何をどうすればいいのかもわからない。
考える暇さえ与えられず、少女たちは練習に没頭した。
あれから2年の歳月が流れ、少女たちは少し大人になった。
昨年のモンペリエ世界選手権では団体総合で5位入賞し、「メダル獲得」への思いも、自分たちのものになってきた。でもだからこそ、それが簡単なことではないとどこでもわかるようになった。
家族より一緒にいる時間が長くなった仲間。それ、ひとつひとつこの歳がわかるようになった。コーチの言ひんせいのこぼれがわかるようになった。やちはなをなごいともわかるようになった……。
技術だけでは他の国に負けるかもしれない。経験だけでは負けるかもしれない。
でもいま彼女たちはわかっている。
私たちに、誰にも負けない、絆がめぐるべき。

Nadeshiko Japan

なでしこジャパン

文/元川悦子

2011年はなでしこジャパンが目覚ましい飛躍を遂げた1年だった。2008年北京五輪で4位に躍進して以来、佐々木剛監督もキャプテン・澤穂希(INAC神戸)らも「メダルを取りたい」と公言するようになったが、2011年7月のFIFA女子W杯(ドイツ)で優勝できると思えていなかったらう。しかし、彼女たちは諦めない気持ちを持ち続け、これまで公式戦で一度も勝つたことなかったドイツ、アメリカを立て続けに撃破。とうとう世界の頂点に立った。
敗色濃厚だった決勝戦の延長後半12分、宮間あや(岡山湯郷)の左CKを絶妙のタイミングで合わせて奪った澤の同点弾が、なでしこジャパンの諦めない気持ちを象徴していた。
「自分の足に当たって入ったけど、みんなで粘ったゴール。今までなでしこに携わってきた人たちの気持ちが結集されたから取れた」と澤本人も強調するように、高度な一体感と精神力がもたらした世界一だった。
日本女子代表が発足した30年前、女子サッカーはまだマイナー競技だった。80年代の女子代表は遠征費を自腹で捻出するなど、満足いく環境とはほど遠かった。93年のJリーグ発足前後は女子サッカーにも一時的ブームが訪れたが、バブルはすぐに崩壊。2000年、W杯で五輪出場さえも逃した。「当時はアメリカやドイツとの実力差がすごく、いくら頑張ってもムリだと思っていた」とベテラン守護神・山郷のぞみ(浦和)も語っていたほどだ。この直後から日本サッカー協会が底上げに本腰を入れるようになり、身体能力や技術の高い若手を次々と発掘。当時断トツの実力を誇っていた北朝鮮を倒して2004年アテネ五輪出場権を手にする。澤も「(2004年4月の最終予選)北朝鮮戦から全てが変わった」と言うように、なでしこは一気に上昇気流に乗る。2008年北京五輪4位、2010年U-17女子W杯準優勝、2011年女子W杯優勝と日本の女子サッカーは確かな前進を見せており、今や世界の強豪国の仲間入りを完璧に果たしたといえる。

とはいえ、2011年女子W杯でイングランドに敗れ、ドイツとアメリカに主導権を握られたとあり、なでしこの実力がFCバルセロナのように飛び抜けているかといえは違う。昨年9月の2012年ロンドン五輪アジア最終予選でも苦しい戦いを強いられており、まだ磐石とは言えない面があるのも事実だろう。
高さ、強さ、スピードといったフィジカル面ではまだライバルに分がある。決勝・アメリカ戦でも岩清水梓(日テレ)と熊谷紗希(フランクフルト)が統率した最終ラインの背後を相手FWにぶちまかれるシーンが何度もあったが、ロンドン五輪本番では対戦国もこうした日本の弱点を突いてくるはずだ。日本の武器であるボールポゼッション力や細かい技術を生かした小気味のいいパス回しを寸断しようと、相手もさまざまな策を練ってくるに違いない。川澄奈穂美、大野忍(ともにINAC神戸)、永里優希(ポツダム)らFW陣も成長しているが、屈強なDFをなぎ倒してゴールするほどの迫力はまだない。決定力の部分も高めていかなければ、五輪優勝という高いハードルは達成できない。
もう一つ心配なのが、選手たちのメンタリティの変化だ。昨年の女子W杯までは完全なるチャレンジャーだった日本が、今は追われる立場になった。チームが国民栄誉賞、澤もFIFA女子最優秀選手を受賞するなど、なでしこメンバーは年が明けても続いている。選手たちは女子サッカーの地位向上のために過剰なほどのメディア露出を続けてきたが、その疲労蓄積も心配だ。肝心の2012年に主力選手たちのコンディションが落ちてしまつたら元も子もない。そのあたりのコントロールもしっかりとっていくべきである。
ロンドン五輪本番で、昨夏より一段とスケールアップしたなでしこジャパンが見られれば、2大会連続優勝という壮大な夢も現実になりうる。選手たちには底力を十分に発揮してほしいものだ。



© Noriko Hayakusa 30

AJPS MUST-SEE ATHLETES

AJPS会員に聞く

ロンドンのイチおし

オリンピック、ものすごい数のアスリートが参加します。超有名な選手以外にも、見るべき選手はたくさんいます。そこで、AJPS会員に聞きました。あなたのイチオン教えてください。
(編集部)

ヴァレントリーナー・アリゲッティ



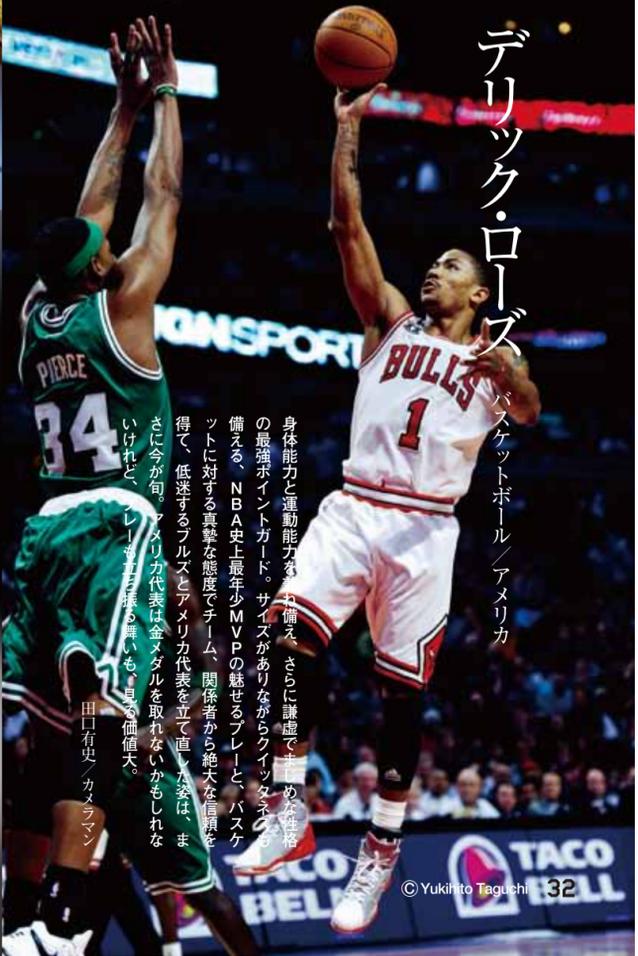
イタリア女子スポーツにおける競技人口はバレーボールが最も多く、代表も層が厚い。2006年に20歳で初代表入りを果たし、09年ユニバーシアード代表でも優勝を遂げてはいたが、「昨年の世界選手権までは3番目のセンター(ミドルブロッカー)として控えに甘んじていた。しかし昨年のワールドカップで日本に戻って来た彼女は、すでにチームの中心選手。ワールドカードでの出場ではあったが、チームはメダルを獲得、早くもロンドン五輪への切符を手に入れている。均整のとれた筋肉質で無駄のない身体は飛ぶというより跳ぶがふさわしい、初となるオリンピックでも必ず何かをやってくれる選手である。」

© Michi Ishijima

石島道康 / カメラマン



デリック・ローズ

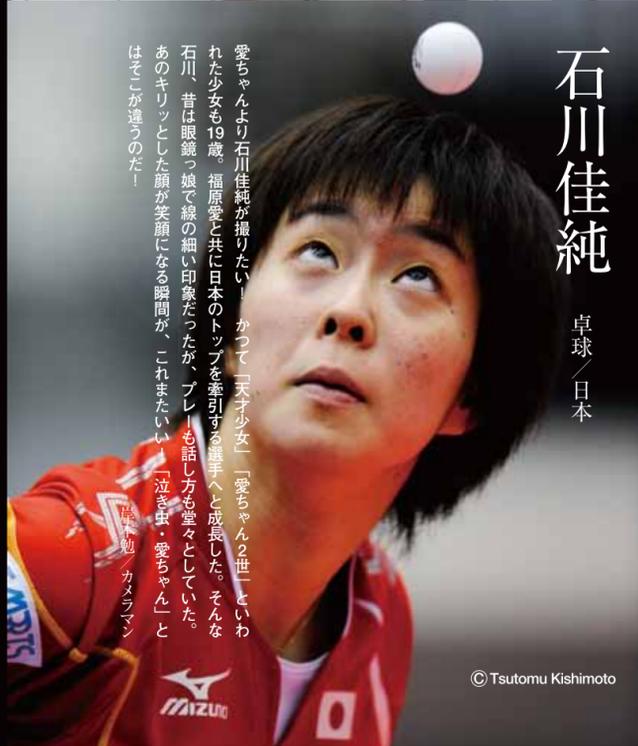


身体能力と運動能力を兼ね備え、さらに謙虚で控えめな性格の最強ポイントガード。サイズがありながらクイックな動きも備える、NBA史上最年少MVPの魅せるプレーと、バスケットに対する真摯な態度でチーム、関係者から絶大な信頼を得て、低迷するブルズとアメリカ代表を立て直した姿は、まさに今が旬。アメリカ代表は金メダルを取れないかもしれないけれど、プレーが輝く舞いも、見る価値大。

田口有史 / カメラマン

© Yukihito Taguchi

石川佳純



愛ちゃんより石川佳純が撮りたい！かつて「天才少女」「愛ちゃん2世」といわれた少女も19歳。福原愛と共に日本のトップを牽引する選手へと成長した。そんな石川、昔は眼鏡っ娘で線の細い印象だったが、プレーも話し方も堂々としていた。あのキリッとした顔が笑顔になる瞬間が、これまたいい。「泣き虫・愛ちゃん」とはそこが違うのだ！

田口有史 / カメラマン

© Tsutomu Kishimoto

太田雄貴



太田選手の魅力は小さな身体で果敢に相手選手の懐に攻め込む姿勢、ポイントを獲得した時の雄叫びは見てごころです。また、太田選手にしかできない相手選手の背中を突く技術は世界一。

築田純 / カメラマン

上田藍



小柄な選手とは思えない積極的なレース展開。苦しい時も笑顔を絶やさないところが魅力的。

泉吾郎 / カメラマン

33 © Jun Tsukida

呉敏霞 飛込／中国

郭晶晶と組んだ 3m 板シンクロ飛び込みではアテネ、北京を連覇。3m 板はアテネ 2 位、北京 3 位ですが、郭が美人と騒がれ過ぎて陰に隠れています。あの切れ長な目と、地味めな感じがなんとも言えませんね。昨年の世界選手権ではシンクロだけではなく 3m でも優勝したけど、若手も出てきているから……。なんとか五輪で金メダルを獲ってほしい選手です。
折山淑美／ライター

リリヤ・シヨブホワ 陸上(マラソン)／ロシア

昨年のシカゴマラソンでも気温が17度から後半になって28度まで上がったものの、男子優勝者のモーゼス・モンソプよりも40km以降のスピードアップで圧勝。彼女は勝負どころの後半の強さが圧倒的だ。
望月次朗／カメラマン

テルマ・モンテイロ

柔道 (57kg 級)／ポルトガル

常に世界大会では上位を争う実力者であり、その美貌は女子柔道界において断トツの金メダル。
乾晋也／カメラマン

川崎真裕美 陸上(競歩)／日本

アテネ、北京と出場したものの、思うような結果を残せず、北京後に富士通に移籍し、3度目のオリンピックに懸けています。競歩は陸上競技の中でも、日本勢が世界で上位に名を連ねていて、入賞やメダルも期待できる競技です。個人的にも数年前に取材させてもらって以降、応援しています。
小野哲史／ライター

ファビアン・ハンビューヘン

体操／ドイツ

「アスリート・オブ・ザ・イヤー2007」も受賞しているドイツ体操界のスター選手。鉄棒を得意種目とし、世界体操でも表彰台の常連選手。日本の美しい体操を学ぶ為、毎年のように冬には一人で日本合宿を組んで来日している。日本から学んだ美しい体操の精神と自らの努力で、更に磨きかけたファビアンのロンドン五輪の鉄棒は必見。来日の際のスーツケース内にはトレーニング関係以外入っておらず、お気に入りの某ジーンズチェーン店でジーンズを始め洋服を買い込み、帰国の際はスーツケースをいっぱいにして帰る。
竹内里摩子／カメラマン

ライアン・ロクテ 競泳／アメリカ

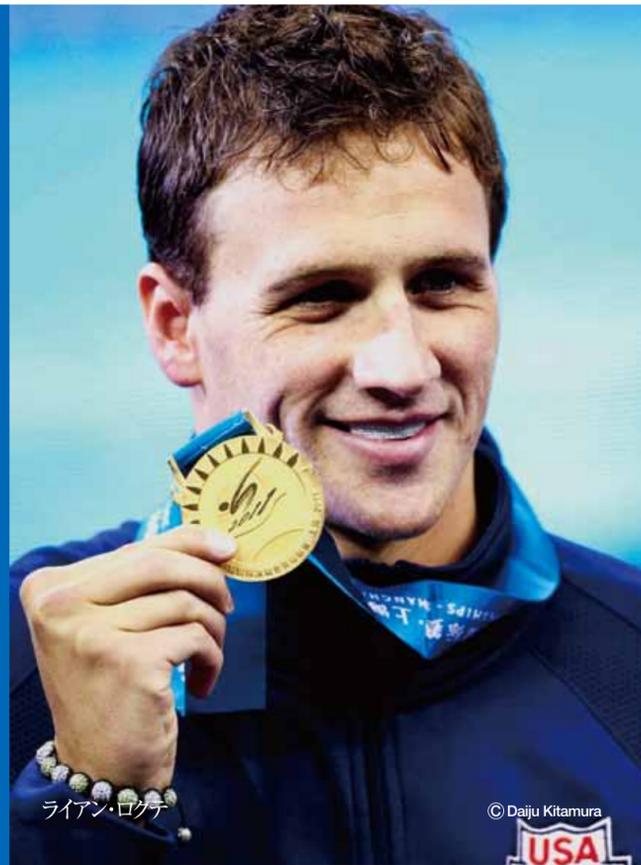
世界水泳で五冠。イケメンとしても注目。
北村大樹／カメラマン

リー・チョンウエイ バドミントン／マレーシア

ASEAN諸国に夢と希望を！ マレーシア人初の金メダリストになってほしい。実現すると莫大な報奨金と終身年金がまっています。
藤田孝夫／カメラマン

小原日登美 レスリング(48kg級)／日本

旧姓は坂本。51kg級では無敵ながら、実施階級に含まれず、これまでは膝のケガ、手術、神経失調による過食症など苦難に見舞われた。04年秋に74kgに増えた体を絞り、復帰したが伊調千春、吉田沙保里の壁が破れず、08年に引退。その後コーチを務めていたが「五輪にかけろの思いは今の選手よりも自分が一番強い」と再認識し、再復帰。昨年の世界選手権48kg級で優勝し、昨年末の全日本選手権でも優勝。初の五輪出場を決めた。世間の注目は薄いかもしれないが、間違いなく金メダル候補の1人。ずっと苦しい思いをしてきた分、何とか報われてほしい。
田中夕子／ライター



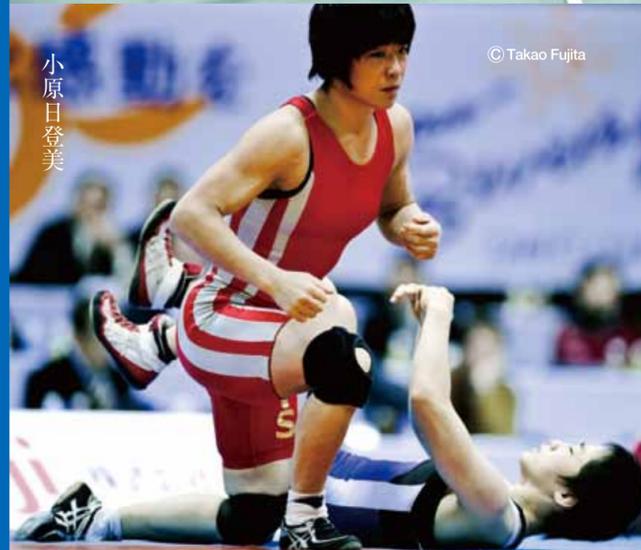
ライアン・ロクテ

© Daiju Kitamura



リー・チョンウエイ

© Jun Tsukida



小原日登美

© Takao Fujita



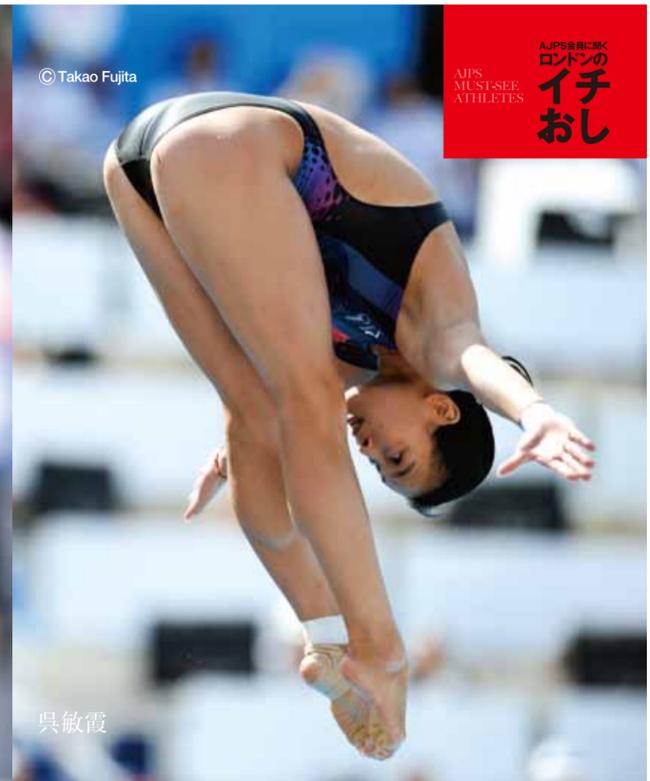
© Jun Tsukida

川崎真裕美



ファビアン・ハンビューヘン

© Rimako Takeuchi



© Takao Fujita

呉敏霞

AJPS&BCS
ロンドンの
イチ
おし
APS
MUST-SEE
ATHLETES



© Jiro Mochizuki

リリヤ・シヨブホワ



テルマ・モンテイロ

© Shinya Inui

34



© Hiroyuki Yakushi



© Koichiro Nomoto



© Koichiro Nomoto

Rugby

日本はなぜ勝てなかったのか

文/ 齊藤健仁

2011年9月、「ジャパン」ことラグビー日本代表は、ニュージーランド（NZ）で開かれた第7回ラグビーワールドカップに出場した。過去6大会では1勝18敗1分の日本代表にとって、今大会は2019年のW杯の东道として決まってから初めての大会。何としても1勝、あわよくば2勝以上を挙げて、日本ラグビーを世界にアピールする——それがラグビー関係者全員の願いだっただけ。ヘッドコーチ（HC）は前大会から引き続き、元NZ代表の伝説的WTBジョン・カーワン。「最低2勝」を目標として臨んだ大会だった。

予選プールはフランス、NZ、トンガ、カナダと同組。だが結果は、前回大会と同じ3敗1分。20年ぶりの白星は挙げられず、通算成績は1勝21敗2分となった。1勝すらできなかった最大の要因は、HCが用いた戦術の精度が高くなかったことが挙げられる。カーワンHCは、ラックを連続してボールをキープした上で、速い球出しで、相手DFのギャップやミスマッチを突きトライを狙った。確かに、ボールキープができた場面ではトライに結びついた。後半途中まで善戦した初戦のフランス戦（21-47）では、95回のラックで62回素早く球出しをしていたというデータが物語る。

だが、他の3試合ではどうだっただろうか。大会前に「2チーム制では戦わない」と公言していたHCだが、2試合目のNZ戦では主力を温存。1・5軍の「いつもと違うメンバー」では、世界1位のホスト国の「黒衣軍団」に、歯が立つ試みもなかった。個々の判断、能力の違いでDFは切り裂かれ7-83で大敗。そもそもボールをキープする時間が少なかった。

3戦目の相手は、当初から最大のターゲットのトンガ。だが、2連敗中のトンガは、日本の攻撃を止めるためラックにプレッシャーをかける。日本は1-2回のラックのうち、48回もスローにさせられ、11回のターンオーバーを許した。勝

てはさすがない。試合終了間際、NO8菊谷崇主将が作ったラックを乗り越えられたシーンが、この試合を象徴していた。18-31で敗戦し3連敗。

4戦目は、W杯20年ぶりの勝利を目指して臨んだカナダ戦。前半こそ17-7で折り返すも、後半追い付かれ23-23で引き分け。同点となるPGを決められた場面でも、接点での反則。また試合終了間際は、ボールをキープし、なぜ相手の反則を待たなかったのか。理解に苦しむ。カナダ戦でも88回のラックのうち32回がスローに、9回のターンオーバーを与えてしまった。

このように、大会を通してラックを中心にボールを継続する戦術を採ったが、接点で相手のプレッシャーを受けて思い通りにはいかなかった。それが1勝もできなかった大きな要因と考える。また戦術と人選との整合性にも疑問が残る。外国人選手を中心にボールキャリアに長けた選手を優先し、ラックの球出しに欠かせないワークレイトの高い選手が少なかった。HCが最後に選んだ選手は、突破力の高い外国出身選手だった。

問題はまだまだある。カーワンHCがこの戦術を本格的に導入したが、2011年に入ってから、ということだ。2007年から指揮を執ってきたにも関わらず、である。1年前に「ほこのメンバーで行く」と言いながら、W杯イヤーになって球捌きに優れたSHなどを数人がメンバー入り。迷いがあつたのだろう。やはりW杯という大きなプレッシャーで、新たな戦術を採用し、落とし込めなかったのは、HCの力量不足と言わざるを得ない……。

2011年も終わろうとしていた12月26日、日本ラグビー協会は、現サントリの監督兼GMのエイミー・ジョーンズ氏を日本の新HCに選出した。HCとしてオーストラリアをW杯準優勝に、アシスタントコーチとして南アフリカをW杯優勝に導いた。ホンモノである。2015年W杯、24年ぶりの勝利に向け、その手腕に大いに期待したい。

うまいかと聞かれたら、「それはもう！」と感嘆符つきで頷く。迷いはない。個々の技術レベルは秀逸だ。面白いかと聞かれたら、「それなりにね」と答える。前監督のチームよりは見どころがあるし、二者択一なら「YES」だろう。

強いかと聞かれたら、「そうだねえ……」と語尾が濁る。弱くはないが、強いと言いつつ抵抗がある。

日本代表を20年以上取材してきた僕が、ザックジャパンに対する肌触りだ。

ザックことアルベルト・ザッケローニが監督に就任してから、日本代表は15試合連続で負けなしという記録を作った。メッシのいるアルゼンチンを埼玉で破り、アジアカップで優勝を飾り、韓国を「チンチン」にした。ブラジル・ワールドカップの3次予選も、2月の最終戦を待たずに突破している。

結果は申し分ない。けれど、このチームを「強い」と言い切ることに、僕はためらいを覚える。「強さ」を印象づけた試合のなかにも、「危うさ」が息をひそめていた気がしてならないのだ。

昨年11月の北朝鮮戦が、どうにも引っ掛かる。完全敵地、完全敵地としていくらいにメディアは騒ぎ立てたが、そうだとしたただか5万人の観衆である。日産スタジアムなら、空席が目につく。

それなのに、金日成スタジアムの空気に呑み込まれてしまった。頼りない。10万人を軽々と超えるイランのアザディ・スタジアムに立つたら、足が震えてしまうのではないか。

6万7000人を収容するサウジアラビアのキング・ファハド・スタジアムでも、ソウルのワールドカップ・スタジアムでも、まともな精神状態でいられないのではないか。

北朝鮮戦はベストメンバーでなかったが、チームの雰囲気というものは、出場メンバーに関係なくピッチ上に反映されるものだ。誰が出ても、結果は同じだっただろう。技術レベルの高さとメンタルの強さには、はっきりとした隔たりがあるのだ。

怒れるキャプターを望む。オフトのチームには、柱谷哲二がいた。ラモス瑠偉もいた。そもそも個人的なメンバーばかりで、監督に食ってかかる選手もいた。衝突は絶えなかったが、そのたびにチームは結束していった。

南アフリカで望外の成績を残したチームには、調子王と中澤佑二がいた。オフト・ザ・ピッチでは、川口能活と中村俊輔が目を光らせていた。勝つためなら悪役を演じる役者がいることで、チーム全体が引き締まっていた。

対照的なのはジーコのチームだ。彼らはいくつものグループの集合体で、

グループ同士を結びつける選手はいなかった。キャプテン・宮本が一体感の醸成に心を砕いたが、チームとしてのまとまりは得られなかった。

ザックのチームは、調子乗り世代を含む北京五輪代表がコアメンバーとなっている。同世代の選手が多く、和気あいあいとした空気に包まれている。緩くはないが、ヒリヒリとはしていない。そこに僕は「危うさ」を感じるのだ。

アジアカップではメンタリティの強さを発揮したんじゃないか、という声があるだろう。確かにそのとおりである。ただ、チームのまとまりを促したのは外的な要因である。退場者が出たり、PKを取られたりといった不条理さが、個々の選手の闘志に火をつけたのだ。すべてのゲームが何事もなく進んでいたら、ファイナルまで辿り着けたらどうか——疑問符がつく。

キャプテンの長谷部誠は、すでに危機感を募らせているように見える。直接的な表現こそ避けているが、そのコメントには厳しい現状認識がにじんでいる。

うまいだけでは勝てない。仲の良さが下地となったまとまりも、ここから先の戦いを勝ち抜くには物足りない。試合中に言い争うぐらいがちょうどいいし、悪役キアラの登場も望まれる。強くて、面白くて、印象に残るチームとは、およそそういうものである。



Soccer
ザックジャパンの死角
文/戸塚 啓

フレームマン 写真・グラフィック作品の加工は私共にお任せ下さい。

フレームマン エキシビジョンサロン銀座
銀座で個展が ¥30,000 (税込)

この度、写真業界に貢献すべくフレームマン、ギンザ、サロンプロムナード壁をミニギャラリーとしてリニューアルオープン致しました。写真作家の方々をはじめ、写真愛好家の皆様まで幅広くご利用頂けます様、何と2週間 ¥30,000円で写真展を開催して頂きます。

額装・展示・会場費全て含んで税込 ¥30,000円！
皆様のお申し込みをお待ちしております。

リニューアルオープン!!
銀座で個展が ¥30,000 (税込)

展示会・グラフィック発表会におかれま
額装・パネル制作・作品二次加工全般を
自社工場で行っております。会場施工・
作品の美術輸送・展示作業・ライティング
作業受け賜わり、展示会の「トータル
フィニッシュワーカー」を目指しております。

詳細はこちらをご覧ください
<http://www.frameman.co.jp/>

(株)フレームマン 本社
〒130-0026
東京都墨田区両国3-10-4
(旧 本所松坂町 吉良邸跡地内)
TEL 03-5638-2211 (代)
FAX 03-5638-2219
Eメール frameman@frameman.co.jp
関連子会社 プロフレーム(株)
TEL 03-3632-2620
FAX 03-5638-2219



© Kiyoshi Sakamoto

春高から冬高へ

文/田中タ子

春高から冬高へ。毎年3月に開催されてきた全国高等学校バレーボール選抜優勝大会(通称・春の高校バレー)が、「全日本バレーボール高等学校選手権大会」と名を変え、1月に開催されるようになって2度目の新春を迎えた。3月開催時は1、2年生しか参加できず、どこか「新人戦」の延長感が否めなかった春高に対し、開催時期が移行したことにより、「冬高」は3年生の出場も可能となった。

競技人口も減少の一途をたどる中、高校卒業後間もなく日本代表入りを果たした栗原恵や大山加奈、在学時にアテネ五輪に出場した木村沙織のように、頭ひとつ抜けた存在は、残念ながら今の高校バレー界にはいない。しかし、個のセンス、技術はかつてのエース達に劣っていない。「チーム」として鍛錬する期間が延長したことにより、顕著にその成果が表れるものもある。

フィジカルだ。

象徴は、東九州龍谷と下北沢成徳との女子準決勝だろう。小粒揃いの今大会ではあるが、東九州龍谷は鍋谷友理枝、下北沢成徳は大竹里歩というジュニア日本代表メンバーにも名を連ねる、将来を嘱望されるエースを擁する。東亜学園、八王子実践で活躍した父と母を持つ鍋谷、大竹の父は元日本代表で最長身選手として活躍、バルセロナ五輪にも出場した秀之氏。「バレー界のサラブレッド」というだけでなく、中学時代は同じ淑徳SCに在籍した2人の対決は、中継局にとっては絶好のライバル対決。いつもながらの多大な「煽り」は少々鼻についたが、そんな大人の思惑を吹っ飛ばすほど、必ず打つとわかっている中で決める。

2人のエース対決は熾烈を極めた。1年時からレギュラーとして活躍した鍋谷が、春高バレーでは負け知らずの3連覇を達成してきたのに対し、クジ運にも泣かされた大竹はベスト4進出もこれが初めて。経験では圧倒的に鍋谷が勝ったが、その差を十分に埋めたのが、フィジカル面で格段の成長を遂げた大竹の攻撃力だった。

大山、木村、荒木絵里香など多くの選手を輩出している下北沢成徳は、小川良樹監督の指導力の高さに加え、全国随一とも言われる厳しいトレーニング量には定評がある。父親の恵まれた体躯を持つ大竹だが、入学時には筋肉量が少なく、体幹トレーニングは設定回数をこなせず、走り込みもいつもビリ。延々と続くバス練習、スパイク練習よりも「何百倍もきつかった」のが、日々休むことなく繰り返されるトレーニングだった。

それでも3年間、地道に続けた成果は顕著だった。1年、2年時とは明らかに異なるスパイクの重さ、スピード。「力が出し切れなかった」と涙してきた過去2年とは完全に違う、3年目の春だった。

フルセットの末、東九州龍谷が勝利。チームメイトが泣き崩れる中、大竹は毅然と前を向き、3年間に胸を張り、こう言った。

「きつかったトレーニングを乗り越えてきたからこれだけの試合ができた。負けたことは悔しいけれど、やってきたことに悔いはありません」

積み重ねてきた成果を、最後の大会ですべて発揮する。名実ともに「日本一」を決める大会になった。



© Yoshio Kato

アジアの急成長と日本の停滞

文/小永吉陽子

アジアはバスケットボール後進大陸である。その中でも日本は、昨夏のオリンピックアジア予選にて、男子7位、女子3位と決して誇れる順位ではなく、アジアの中でも苦戦をしいられている状況だ。

ロンドンオリンピック出場をかけた世界最終予選が今夏に開催される。女子はアジア3位で最終予選の切符をつかんだが、男子はアジア7位のため、3位までが出場できる最終予選の切符を手にするにはできなかった。まずは最終予選に出ることが目標の男子だが、ライバル国ひしめき合うアジアでは、その道のりすら長く険しい。

一方で、後進大陸だからこそ、今アジアは凄まじい熱気を帯びて成長を遂げようとしている。ここからは男子の例を紹介したい。

欧米諸国に比べて身体能力が劣るアジアだが、各国に一榨与えられる帰化選手の粋を使って補強する国が急増。欧米から国際経験豊かな指導者を招き入れ、フィジカルトレーニングや戦術、強化方法の構築に力を注ぎ始めた。そうして近年台頭してきたのが、中近東勢のイラン、ヨルダン、レバノンだ。また運動神経の高いフィリピンも若手育成が実り、上位に進出。欧州のスタイルを持つカザフスタンも侮れない存在であり、今まさにアジアはカオス化している。

東アジア勢も負けてはいられない。高さや技術でアジアナンバーワンを誇る中国は、意外と知られていないがバスケットは卓球に次ぐ人気で、団体スポーツではサッカーと人気を二分する。中国リーグではNBAから引退した国民的スター、ヤオ・ミンが地元・上海シャークスのオーナーとなって経営に力を入れ始めたことが話題となり、NBA選手をはじめ、ヨルダンや台湾などアジア勢を積極的に受け入れて、活性化を図っている。すでにアジア予選で優勝してロンドン行

きのチケットを獲得しているため、リーグ戦を早めに切り上げ、オリンピックに向けての準備を始めるという。

韓国は勢いのある若手が多く台頭してきた。「オッパ部隊」お兄さん部隊」と呼ばれる親衛隊をしたがえて人気絶頂だった90年代。彼らが引退したことで一時は人気に陰りが出ていたが、世代交代を押し進めてきた今、若い息吹があちこちに芽生えてきた。オリンピック最終予選にも2大会連続出場することから、間違いなく中国とともに、東アジアをリードしている立場だ。

また台湾には、今シーズンのNBA界でセンセーショナルなデビューを飾ったジェレミー・リン(23歳)というスターが彗星のごとく現れた。リンはアメリカ生まれ、アメリカ育ち、ハーバード出身のキレ者。先祖は中国生まれ、両親は台湾生まれというところもあり、台湾代表入りも囁かれている。

ここまであげた中に、残念ながら日本の名前はない。今夏はいよいよオリンピックが開催されるが、このままではオリンピック出場は夢のまた夢の話だ。

日本はオリンピックに出る前に、最終予選の切符を獲得するためにアジア3位までに入ることが現実的な目標となるだろう。まず何より、現在国内でJBLとb1に分裂しているトップリーグを統合させ、選手の意識と運営をプロ化していくことが先決になる。

日本バスケットボール協会では、2シーズン後の、2013-2014シーズンよりJBLとb1を統合させた「新リーグ」を開募する予定だ。現在はチームを公募している段階だが、この新リーグを急ピッチで整備していくことが、バスケットをメジャー化させる一歩となり、アジアを勝ち抜いていくにはほんの近道となるだろう。



違和感なのか。

かれこれ15年、そんなものを感じながら「ツール・ド・フランス」を追ってきた。選手が見せるフォルムの流麗さ。チームウェアが見せつける垢抜けたコマシヤリズム。街並みが顕著な歴史文化。3週間3500kmのイベントスケール。かの地で行われる、すべてが一流の美しき運動会を前に、私は傍観者でしかなかった。ナショナルチームの激闘に興味が、そこに「当たり前」のように日本人選手がいるか、たかが「因で……」。

いつかは、いつかはと思いが、それがなくなった09年、新城幸也と別府史之の2人が出場し、翌年にも新城の出番があったことで、ツールにおける日本人選手の存在が「当たり前」の時代になる、と思えたのだ。

しかし昨11年、新城の所属チーム「ヨーロッパ」のお膝元、バンド県がスタート地となったことでチームの注目度が上がった。その影響から、実力では問題のない新城だったが、バンドの選手に枠を奪われ、日本人のいない「いつもの」ツールに戻ったのである。

7月23日。パリのフィナーレを翌日に迎える日は、グルノーブルでの個人タイムトライアルであった。前日、伝統の山岳ステージ、ラルプ・デュエスでルクセンブルグのアンディ・シニョックが総合1位を手に入れたが、圧倒的な時間差を稼ぐことは出来ず、タイムトライアルに長い苦闘の位、オーストラリア人カデール・エハンスは最後のチャンスがある最後の大会として迎えていた。

緊張感漂うはずのステージなのだが、この小さな町に駆けつけた観客たちは一様に、すし詰めになりながらも夏の風物詩を楽しもうと、居合わせた初対面の「ツール」仲間と思いきい、談話に華やかさ、およそ2分おきに来る選手に楯を飛ばしていた。「アレックスレー」「ベンガベンガー」「ゴー、ゴー」。飛び交う言葉から、車道にあふれんばかりの観客は、世界各地から来ているのがわかる。

開始から5時間、16時を過ぎ、64人目、総合4位につけるフランスの代表格、トーマ・ボクレールが「ヨーロッパ」の緑ジャージを着て駆け抜けた。我が新城のチームキャプテンである彼は、格段に大きな、大きな声援を地元フランス人観客から貰っていた。数分後、優勝を争う注目2人が走り抜けたが、その声援はトーマのそれに及ばない。

あの時間いた波のように迫っては過ぎ行くトーマへの声援が今でも脳裏に響いている。でも、おい、ちょっと待ってくれ！ その緑のチームには、時にトーマより走りをする日本人がいるんだ！ 私も叫びたかった。あの時あの場所で「アレックス、アラシロー」とい

や、本当に。場違いなのはわかっているが、居心地の悪さは味わいたくない。

この日、エハンスが好タイムを出し、98回の歴史でオセアニアに初優勝をもたらした。

Bicycle

ツールドフランスの楽しみ

写真・文/井上六郎

Ski

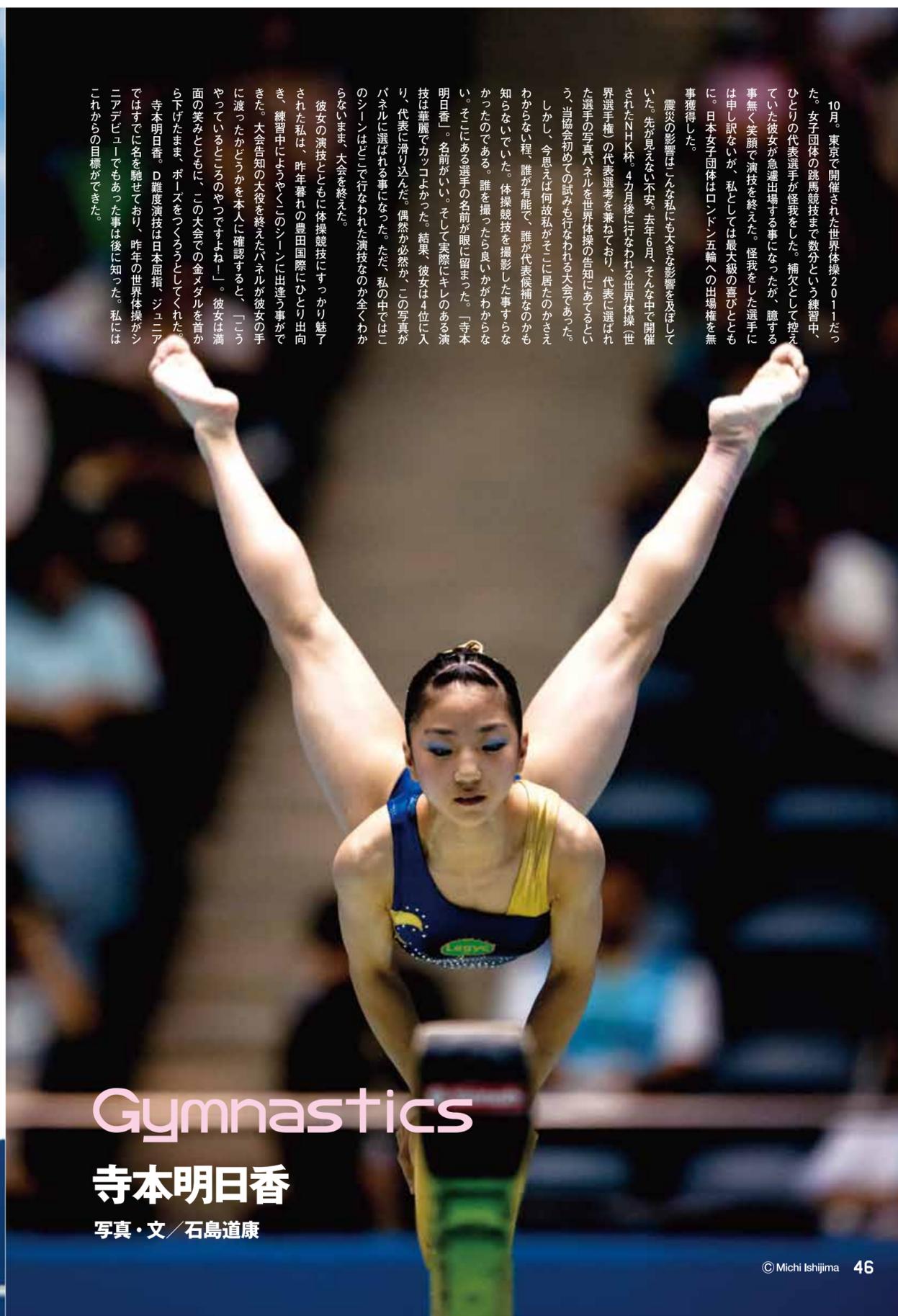
10cmと8mがもたらすもの

写真・文 / 田中慎一郎

もしあなたがスキーをお持ちなら、その長さは何センチでしょう？
 165cm？ 180cm？ 200cm？
 200cm以上なら、それは10年以上、はたまた20年以上前の古いスキーに間違いありません。そうすよね？
 アルペンスキーワールドカップは毎年10月にオーストリアのセルデンで開催しますが、今季はその開幕戦前の会議で選手たちから反対意見が噴出しました。それと言うのも、FIS（国際スキー連盟）が、来季2012-13シーズンからスキーの長さと同回転半径を「昔の200cm時代に戻す」かのとき規制をかけることを発表したからです。
 来季からジャイアントスローム（以下、GS）のスキーの長さは現在の185cm以上から195cm以上へ、最小回転半径（ラディウス）も27mから35mへと、ターンの回転半径が大きくなるように規制変更されます。今季より10cm長くなり、回転半径が8m大きくなるだけではありませんが、その10cmと8mもたらす影響はGS競技そのものが20年前に逆戻りするとも言われています。
 1998年ころからワールドカップに本格導入されたサイドカーブの強いカービングスキーは、それまでの「雪面への接地面積が広いほうが有利で、それには200cm程度のスキーの長さはどうしても必要」というアルペンスキー界の常識を覆しました。
 GSならば180cm台でスキー先端と後端を太くして足下が細い、従来より回転半径が短く曲がりやすいスキーで、「ずらすことなく、2本のレールのように雪面を切っていく滑りが最速である」という結論を導き出すほどに革新的なスキー技術の大変革をもたらしたのです。
 しかし、曲がりやすくなったのと同時に雪面とのグリップ力が増しスピードも上がるた

め、膝や腰にかかる負担が大きく、ワールドカップ選手のケガの元凶とさえ言われてきました。
 そこでFISはヘルメットや背髄パットの義務化やレースコースの防護ネットの強化以外にも、競技そのものにも「安全対策」を施しました。近年のGSはカービングターンでは曲がりきれないほどに振り幅を大きくし、斜面下方ではなく、横に移動しなければならぬ時間をわざと大きくとるセッティングで「スピード制限」に躍起になっています。
 もちろん、それでもワールドカップの選手たちはそのセッティングに素早く対応し、時速60kmから80kmのスピードを維持して氷の急斜面を滑り降りてきます。
 今回の規制はさらにスキーを曲がりやすくしてスピードを落とさせ、選手の安全対策を図ろうというのがFISの意図ですが、スピードを競う競技の本質に逆行するかのような用具規則の改訂が果たして目指すべき方向なのかどうかは、意見の分かれるところでしょう。
 08-09シーズンのワールドカップ総合チャンピオン、アクセル・ルンド・スウィンダル（スウェーデン）は自身のツイッターで、「来季用に昔のワールドカップのビデオをYouTubeで掘り出してステンマルクの滑りを研究中」なんて皮肉ともとれるつぶやきをしていました。
 旗門の手前で素早くスキーのテールを振り出して方向を決め、次の旗門まで直線的に斜滑降する「スイング&グライド」という技術が全盛を誇っていた時代が25年ほど前にありました。来季はそんな「前世紀」のオールドテクニクが随所で見ることが出来るワールドカップになるかもしれません。これも皮肉ですけどね。
 写真は2012年1月、スイス・ウエンゲンのダウンヒル。スキーの長さは215cm。

10月、東京で開催された世界体操2011だった。女子団体の跳馬競技まで数分という練習中、ひとりの代表選手が怪我をした。補欠として控えていた彼女が急遽出場する事になったが、臆する事無く笑顔で演技を終えた。怪我をした選手には申し訳ないが、私としては最大級の喜びとともに、日本女子団体はロンドン五輪への出場権を無事獲得した。
 震災の影響は、そんな私にも大きな影響を及ぼしていた。先が見えない不安。去年6月、そんな中で開催されたNHK杯。4カ月後に行なわれる世界体操世界選手権の代表選考を兼ねており、代表に選ばれた選手の写真ハネルを世界体操の告知にあてるといって、当協会初めての試みも行なわれる大会であった。しかし、今思えば何故私がそこに居たのかさえわからない程、誰が有能で、誰が代表候補なのかも知らなかった。体操競技を撮影した事すらなかったのである。誰を撮ったら良いかわからない。そこにある選手の名前が眼に留まった。「寺本明日香」。名前がいい。そして実際にキレのある演技は華麗でカッコよかった。結果、彼女は4位に入り、代表に滑り込んだ。偶然か必然か、この写真がハネルに選ばれる事になった。また、私の中ではこのシーンはこの行なわれた演技なのか全くわからないまま、大会を終えた。
 彼女の演技とともに体操競技にすっかり魅了された私は、昨年暮れの豊田国際にひとり出向き、練習中によやくこのシーンに出逢う事ができた。大会告知の大役を終えたハネルが彼女の手に渡ったかどうかを本人に確認すると、「こうやっていこうのやつですよ！」。彼女は満面の笑みとともに、この大会での金メダルを首から下げたまま、ポーズをつくらうとしてくれた。寺本明日香。D難度演技は日本屈指、ジュニアではすでに名を馳せており、昨年の世界体操がシニアデビューでもあった事は後に知った。私にはこれからの目標ができた。



Gymnastics

寺本明日香

写真・文 / 石島道康

「真央がシニアに上がったなら、誰も勝てないんじゃないかな……」
 2005年の世界ジュニア選手権優勝。05-06シーズンのグランプリファイナルで優勝。中学生ながらいよいよ頭角を現し始めた浅田真央について、3歳年上の安藤美姫はそう漏らしていた。天賦の才能は、誰が見ても明らかだった。天真爛漫に氷上を舞う少女は、たちまち国民のアイドルとなった。あとは金メダルへのレッドカーペットを、真すぐに進むだけだった。

しかし現実には厳しいものだった。バンクーバー五輪の前シーズンあたりから、いわゆる真央スマイルが影を潜める。練習拠点の移動、コーチの変更、とりわけ身体的な成長は、負の要素として浅田自身を苦しめた。スケートは、想像以上にセンシティブなスポーツである。少女から女性に変わる過程で生じた僅かなズレは、得意だったジャンプから軽快さを奪った。さまざまな環境変化と戦いながらも何とかバンクーバーには間に合わせたが、結果は銀メダル。採点方式を熟知し戦略的に臨んだキム・ヨナには、届かなかった。その差は小さくて、大きかった。フリー演技直後のインタビュ、どんな4分間でしたか、と聞かれた浅田は、涙ながらに言葉を絞り出す。

「長かったようで、あっという間でした」
 あたかもそれは、トリノ五輪からの4年間を指した言葉のように聞こえた。

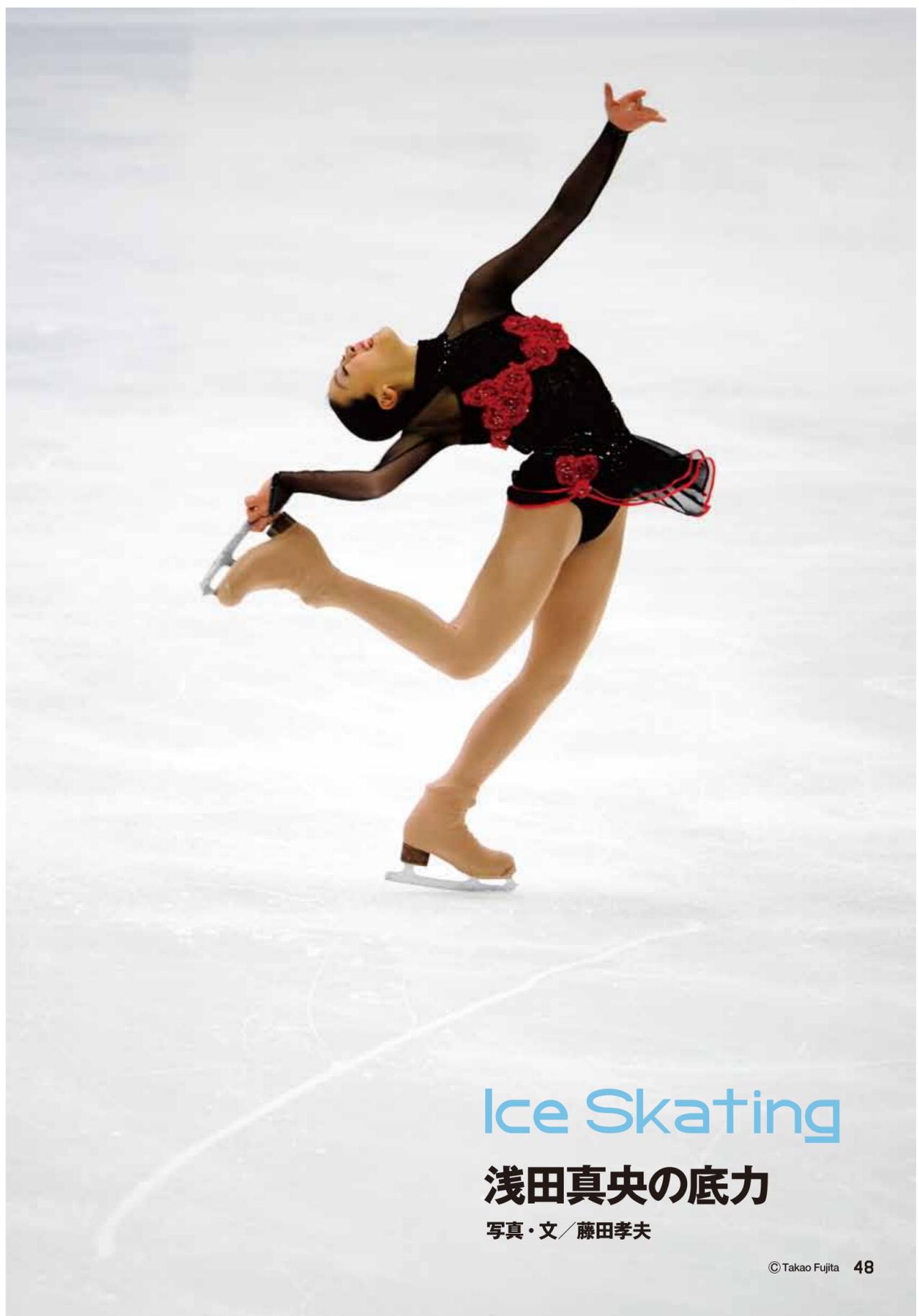
トリブルアカセル、言わずと知れた浅田真央の代名詞である。バンクーバー五輪から

2年経った今でも、時には刃となることを承知の上で、彼女はその大技と向き合い、つき合っている。いつしか私たちが追いかけているのは、トリブルアカセルを跳ぶ浅田真央ではなく、それでも愚直なまでにトリブルアカセルに挑み続ける浅田真央に、共感し、感動しているのだ。採点上の損得だけでは片付けられない何かに挑む姿が、尊く映るのだ。

今シーズン、3季目のグランプリファイナル進出を決めた浅田だったが、そのリンクに立つことは叶わなかった。同時期、最愛の母匡子さんを病気で亡くしたからだ。浅田の精神状態を慮れば、多分2週間後の日本選手権にも出場しないだろう。よく知る関係者は、皆そう語った。ところが浅田は、母の葬儀を終えてから3日後には、リンクに戻っていた。そして2週間後の日本選手権で、2年ぶりの優勝を飾る。フリー演技「愛の夢」を滑り終えた瞬間、浅田は訴えるようなやさしい眼差しで天を見上げた。

先の四大大陸選手権、浅田はしばらく封印していたトリブルアカセルに挑んだ。わずかに回転不足だが、なんとか着氷できている。ステップ、スピンのレベル4（最高）の評価を受け、復調ぶりは明らかだ。決して守らず攻めようとするその姿勢は、フィギュアスケートが演舞ではなく、スポーツであること改めて感じさせてくれる。

視界良好。きっと浅田真央には、ソチ五輪へ真すぐに伸びた道が見えているはずだ。



Ice Skating

浅田真央の底力

写真・文 / 藤田孝夫



OLYMPUS PEN E-P3

The 3rd Generation
OLYMPUS PEN

変わらないこと。変わること。
世界最速AF[®]。PENは、第3世代へ。

2011年11月1日現在、レンズ交換式カメラの中で、M.ZUIKO DIGITAL 14-42mm F3.5-5.6 3rd Gen. 撮影時、目視測距方式による。

オリンパスギャラリーのご案内

オリンパスギャラリーでは、写真文化の普及・向上に貢献することを目的に、さまざまな写真展を行っています。

オリンパスギャラリー東京

開館時間 10:00~18:00
最終日 15:00まで(日・祝日休館)
〒101-0052
千代田区神田小川町1-3-1
NEF小川町ビル
Tel: 03-3292-1934

オリンパスギャラリー大阪

開館時間 10:00~18:00
最終日 15:00まで(日・祝日休館)
〒550-0011
大阪市南区明波座1-6-1
MID恵本町ビル
Tel: 06-6635-7911

OlympusPen.com

お問い合わせ【オリンパスカスタマーサポートセンター】(フリーダイヤル): 0120-084215 / 携帯電話・PHSからは042-642-7499 / FAX 042-642-7486 / カスタマーサポートセンターの営業日、営業時間、最新情報についてはオリンパスイメージングホームページ <http://olympus-imaging.jp>にて情報をご確認いただけます。



© Yukihito Taguchi

ボールパークの匂い

写真・文/田口有史

初めてアメリカでボールパークを訪れたのは93年。留学をきっかけに初めてアメリカに行った時のことだ。あの国に留学すれば、MLBもNBAもNFLもNHKも全部見に行ける、それがアメリカを選んだ理由だった。デーゲームの芝の輝き、オジー・スミスの何気なく華麗なクラブさばき、バリー・ボンズが十字を切ったフライをキャッチする姿、そんな光景が今でも脳裏に焼き付いている。

あれからずいぶん月日が経って、多くの日本人選手がメジャーリーグに渡ってきた。イチローのように素晴らしい活躍を取った選手。田口のように数字には表れなくても、ファンに受け入れられた選手。井口や岩村のように短い間でも輝いた選手。あるいは井川のように不遇をかこってしまった選手。渡米してきた選手の数だけの物語があった。

僕の中で一番印象に残っているのは、やはり田口壮選手だろうか。守備固めなど、派手ではないが女人受けする、重要な役割をしっかりとこなしていた。こゝ一番、という華やかな場面での登場ではないのに、田口が出てくるとセントルイスの球場が沸いた。

忘れられないシーンがある。06年のワールドシリーズ、彼はいつものように代打で登場した。敵も味方も観客も記者も、そしてもちろん僕も、絶対に送りバントをすと思われている中で、田口は本当にバントをして、そしてしっかり決めた。

プレー以外でも、通訳なしでチームになじみ、練習に真摯に取り組む彼は、ファンからもチームメイトからも信頼を集めていた。僕の名字を見た、日本がどこにあるかわからないような田舎

のセントルイスの普通の人々から、ソウとは親戚なのか? と聞かれるほどだった、と言えば彼の認知度をわかってもらえるだろう。

それにしても、今年ほどそれぞれが違った立場でアメリカへ行く年も珍しいのではないかと思う。アメリカでプレーすることを選択した5人、ダルビッシュ、岩隈、川崎、和田、そして青木。僕が考える、メジャーで活躍するために一番大切なことは、アメリカ野球に慣れるということよりも、アメリカの生活に慣れるかどうか。それは、言葉が通じる、通じないではなく、アメリカのように(いい意味で)がさつで、大味な中で、普通の生活の中でアメリカ人化できるかどうかにかかっている、と僕は思っている。

メジャーリーグの環境も以前と比べるとずいぶん変わった。フォトグラファーの取材場所が減り、テレビが偉くなり、選手の年俵も球場のチケットも、ビールも駐車場もとんでもなく高くなり、選手がイメージをまず考えるようになり、ちょっと「イヤ」だったような選手がいなくなり、日本人だけ取材する日本人が多くなった。でも、変わらないものもたくさんある。中でも、ボールパークの匂いは、あの頃と変わらない。何とも表現できなくて、「匂い」と言うしかないけれど、芝の匂いなのか、フライドポテトを揚げる油の匂いなのか、ケチャップの匂いなのか、松脂の匂いなのか。とにかく、そんなものが混ざったような匂いだ。

あのボールパークの匂いの中で、新しい5人の日本人がどんなプレーを見せてくれるのか。今年はいつものより少し楽しみの多い年になりそうだ。



© Shinji Kouchi

石川遼への依存度

文/杉山茂樹

ゴルフで優勝することは簡単ではない。賞金ランキング1位の選手でも、年間せいぜい3勝程度。トップ10を外す試合も半分ぐらいある。人気選手といえども、テレビカメラが追いかける必然性のある試合は思いのほか少ない。マッチプレーを除けば、人対人の戦いではない。相手は対コース。似たような競技性を持つスポーツは、決して多くない。ゴルフはいささか特殊な、スターが生まれにくいスポーツだと僕は思う。

石川遼のスター性、存在感、カリスマ性は、誰もが認めるところだが、他の競技のスターとは違う。圧倒的なものではない。世界に目を転じれば、50番程度の選手。いわば国内級だ。ところが、日本のゴルフ界では圧倒的なスターで通る。スコアが振るわなくても、トーナメントの中継には、必ずと言っていいほど登場する。20位、30位であっても、優勝争いをしていく選手に迫るくらい画面に登場する。

他の選手はしわ寄せを食う。登場時間はおのずと減る。彼らの顔は見えにくい。日本のゴルフ界は、石川遼一本頼りの構造を取って望んでいる様子だ。それに異を唱える人は見かけない。彼の昨年の賞金ランキングは3位。1勝もできなかった昨年は、とりわけパランスの悪い世界が出来上がっていた。そしてそれを関係者は全員が肯定していた。

石川遼は見るからに常識人だ。世界の事情も知っている。そのあたりの矛盾は間違いなく察知しているはずだ。一方で、それによって国内のゴルフ人気を保たれていることも知っている。

る。自分中心に産業が回っていることを。だから、必然性の低いインタビューにも、嫌な顔一つせず、笑顔で登場。明瞭な日本語でしっかりとした受け答えをする。健気にも、だ。

日本を脱出する意味でも、アメリカツアーに即、行くべきだと言いたくなるが、石川遼に出て行かれると、国内男子ツアーは大ダメージを受ける。そうした仕組みになっている。バランスの悪い社会の歪みが、一気に表面化するだろう。

悩みは多いのではないかと想像する。彼自身の居心地は良いようで悪い。いま20歳。大人と言えど大人だが、その入り口に立つたばかりの青年だ。不慣れに思えて仕方がない。

テニスの錦織圭が全豪オープンでベスト8入りする姿を見ると、その思いにいつそう拍車がかかる。本来あるべき姿は彼にあり。トータルなスポーツファンの中には、そうした目線で石川遼を見ている人も少なくはないはずだ。

メディアの弱さを感じてしまう。ゴルフメディアは、とりわけ商業的なものに弱い傾向がある。これは他の競技のメディアにも共通する問題だ。日本は非商業的な正論を吐きにくい環境がある。儲かるか儲からないかが先決。儲かるなら、部数が伸びるなら、視聴率が上がるなら、そのあたりの問題から目を反らそうとする。僕たちフリーランスはそこでどう出るか。僕がゴルフの世界で飯を食っているライターなら、どうするか。思ったことを口にしても、リスクの少ないサッカー界のような調子で迫れるか。そもそもAJPSは、どのスタンスでありたいか。いま、究極の選択が問われている気がする。



今から30年以上前、当時動いていた神奈川県総合リハビリテーションセンター写真室（神奈川県厚木市）で私は車いすバスケケットボールに出会いました。昼休みにカメラを持って病院の周辺の風景などを撮影していたとき、ふとぞういた体育館で、顔見知りの職員が車いすバスケケットボールをやっていたのです。

誘われるまま、私も仲間に入ることになりました。立ったままバスを送るのもやりづらく、自分も空いている車いすに乗り、ゲームをするようになりまし。そのうち、車いすバスケケットは「身体の不自由な人のバスケケットボールではなく、「車いすを道具として使うバスケケットボール」なのだと思うようになっていったのです。

冬季パラリンピックで大活躍するマシンのひとつ、チェアスキーも私の勤務していたリハビリテーションセンターで開発されたものです。スキーで怪我をしてここに入院し、車いすの生活を送ることになった患者さんがいたので、彼はもう一度、どうしても雪の上を滑りたいと願いました。その気持ちからリハビリ工学のスタッフを動かし、チェアスキーの開発に結びついたのです。スキーをあきらめていた彼が、再び雪上にシブールを描く姿を撮影して、私は彼以上に興奮したものです。

身体に障害を持ちながらも厳しい競技の世界に身を置くことによって自らを鍛え、常に「一歩上へ」の挑戦を継続しているアスリート達がいま。

日本においては1998年に長野県で行なわれた冬季パラリンピックをきっかけに、障害者

スポーツに対する人びとの関心が急激に高まりました。競技を生中継しないテレビ局に抗議の電話が殺到したところからその一端がうかがわれます。2年後の2000年にシドニーで行なわれた夏季大会では日本人選手の大活躍もあり、大勢の報道陣が当地を訪れました。1996年のアトランタ大会の時とは比べものにならないほど多くの報道がなされました。

また障害者スポーツの大会に、選手として、あるいはボランティアとしてたくさんの方が参加するようになったり、小中学校の総合的な学習の中で障害者スポーツがとりあげられたりするなど、障害者スポーツに対する人びとへの注目度は日増しに高まっているようです。しかし、こうした状況を手放しでは喜べない事実があります。発展途上にある障害者スポーツには解決しなければならぬ課題も山積しているのです。

パラリンピックの種目だけが障害者スポーツではありません。新聞やテレビの報道では陸上や水泳、車いすバスケケットボールといった華やかな種目で活躍するトップレベルの選手ばかりに注目が集まります。その一方で、知的障害のある人のスポーツや、より重度の障害者の運動やスポーツには注目が集まりにくいこと。施設や自宅から外に出られずに、スポーツをやるうにも、指導者も、場所もないといった人びとが多数いるという事実。勝敗が重視される競技性の高いスポーツにはより重度障害のある人が参加しにくいということなどが問題点としてあげられます。

こうした課題を解決するキーワードとして

「個人的成長への注目」「個々からたに適応した身体活動」「統合」の3つをあげたいと思います。

「個人的成長への注目」とは、人と比べて、いうことではなく、人がスポーツをおしてどのように成長していくかという点に注目するという意味です。競技レベルの違いや年齢、障害の状況にもかかわらず、すべての人に当てはまる考え方は。

2つめの「個々からたに適応した身体活動」とは、スポーツのルールや用具を各個人に適応させ、すべての人が主役となって楽しめる運動やスポーツという考え方は。障害者スポーツは地域のスポーツセンターや体育館、学校、病院やリハビリテーションセンターなどでさまざまな目的をもって行なわれています。一人ひとりが主役になれる運動やスポーツが必ずあるはずは。

3つめの「統合」はスポーツに関するさまざまな場面で、障害のある人となない人が共存していく道を追求するという意味です。実際にスポーツをやっている場面や大会、スポーツ組織レベルでの統合が考えられます。障害のある人となない人が一緒に行なうスポーツなんて、考えただけでわくわくしてきます。「個々からたに適応した身体活動」によって創られる個人にあったスポーツ同様、統合スポーツは新たなスポーツ文化の創造といえるでしょう。私が、35年間にわたりパラリンピック・アスリート達から受け取った感動と生きる勇気を、私の写真を通して、世界中の人たちに伝えることができれば、この上ない幸せです。

Adapted sports

障害者スポーツの現在と未来

写真・文 / 清水一二



© Akito Mizutani



© Atsushi Kondo

編集後記

正直な話、昨年の11月初めに編集委員長の役目を引き受けたとき、たった56ページの冊子を作るのに、これほどの時間と労力が必要だとは思っていませんでした。少なくとも、お節料理を食べながらページのデザインや構成について考えた経験は、これまでの人生においては一度もない。大変なこともあったし、不慣れなこともあったが、そのつど誰かが手を差し伸べてくれて、ようやく完成にこぎつけることができました。

僕はカメラマンなので、写真について語ると、制作中楽しかったことのひとつに、他人の撮った写真を相当数、拝見させてもらったことがある。まだまだだなあ、と思う写真もあれば、これは自分には撮れないな、と感服させられる写真もあった。もう少し被写体に寄ったほうがいいもの、引いたほうがいいもの、もちろん完璧な距離感のものもあった。そしていずれの作品からも、優れた写真とはどういうものなのかを改めて考える機会を与えてもらった。自分の知らなかった新しい分野にチャレンジしてみたいという気持ちも抱くことができた。

AJPSマガジンは今回から8ページ増えて、しかもオールカラーになった。なぜそうなったかという点、僕がわがままを言ったからだ。そのほうが見栄えもいし、少しでも多くの会員の作品を載せることができる。AJPSマガジンはAJPSという団体の価値観を映したものであるべきだ。

リニューアルしたマガジンが会員の方、特に若い方々の刺激となれば、僕としては嬉しい。そして次号は、さらなる多様性を持った作品を掲載できるものになれば、と考えている。

ご協力いただいたみなさん、本当にありがとうございました。

AJPSマガジン Vol.29 MARCH 26 2012 定価 800円(税込)

編集・発行人 水谷章人
 編集委員長 近藤篤
 編集委員 木村理 三木麻里
 フォトエディター 井田新輔 末石直義 高橋学 戸村功臣 畠中良晴 早草紀子 益田佑一 渡辺智宏
 アドバイザー 赤木真二 岸本勉 藤田孝夫
 デザイン 湊元英一郎
 校正 津田博司 安田由美子
 印刷 株式会社販究
 編集・発行所 一般社団法人 日本スポーツプレス協会 (AJPS)

〒112-0013 東京都文京区音羽1-21-10 関根ビル603 TEL/03-3946-9033 FAX/03-5981-9606 <http://www.ajps.jp/>

【注】各原稿は2012年3月1日現在の内容です。本誌掲載記事・写真を無断で転送することは固くお断り申し上げます。

AJPS VOL.
magazine 29
 2011-2012

Association Japonaise de la Presse Sportive

www.aips.jp

Canon



At the heart of the image

OLYMPUS

PENTAX
A RICOH COMPANY



IMAGINE Art Planning



UC
ユニバーサルカラー

CREATE

アサヒカメラ

SanDisk

Manfrotto
Distribution